

ニチメン東京社友会

〒107-8655 東京都港区赤坂 2-14-7 双日(株)内 17F
URL <http://nmtkshayukai.hp.infoseek.co.jp/>
E-mail menkwa@sojitz.com

【目次】

1. 2007年度 総会・懇親会開催	倉又 則夫	2
2. 社友会会長挨拶	河西 郁夫	3
3. 来賓挨拶	双日(株)会長 土橋 昭夫	4
4. 長老代表挨拶	土橋 久男	6
5. 2006年度収支報告、2007年度事業計画		7
6. 新規加入手続き案内・新規加入者リスト		8
7. 平成20年1月18日新年会開催の通知		9
8-①. 大阪社友会創立総会・懇親会開催		10
8-②. 大阪ニューヨーク会開催		10
9. 2007年度会員名簿の正誤表		11
10. OB便り；エッセイ等 BRICs特集		
BRAZIL … 躍進するブラジルと還流する日系コロニア	篠塚 美郷	12
RUSSIA … 泣く子も黙るKGB	谷 昌興	16
INDIA(1) … インド国鉄電化のこと	林 義人	18
INDIA(2) … ジャパン・コットンの昔より	長谷川 洋	19
CHINA … 中国の思い出	福原 昭二	21
仏領インドシナに生きる一続篇―“懐かしき越南、第二の故郷”	久澤 克己	23
退職後のわが人生“スイスイ スラ ラッタと趣味に生きる”	渋谷 義	25
『ローマ人の物語』を読み終えて	蜷川 親秀	27
ベトナム駐在記 ―サイゴン陥落脱出行―	塚本 幸雄	28
回想のニチメン・バンコク支店	新野 敬一	31
リタイヤー後の人生 ―世界万博、ABIC, 日本語教師―	村井 靖武	33
ヨーロッパ駆け巡り	幾島 清	35
『カダフィーに狙われた男』後日譚	浮貝 泰匡	37
11. 各OB会&同好会便り		
ニチメン機友会	与儀 治	39
いろは句会	宇治田 薫	40
ニチメン化工OB会	栗田 久彌	41
囲碁部 秋の軽井沢合宿報告	榊山 俊次	43
食料部OB会ニュース	倉持 次雄	44
12. OB著作出版ニュース；佐武博司さん著『いつまでも現役人生を走り続けるために』		44
13. 会員長寿者へのお祝い		45
14. 役員・世話人 人事		46
15. 双日からのお知らせ		46
16. 計 報 (2007・5月～11月)		47
編集後記	長谷川 洋、高木 亨一	48

第二回ニチメン東京社友会総会・懇親会開催報告

世話人代表 倉 又 則 夫

旧長月会解散後の新しいコンセプトに基づくOB会として、昨年発足したニチメン東京社友会は、昨年に引き続き、今年は、7月14日茅場町の鉄鋼会館に、170名余のOB・OGのご参集を得て、総会・懇親会を盛大に催しました。

今年も、昨年同様、世話人およびOBボランティアの献身的ご尽力により手作りの会合を持つ事が出来ました。OBの、OBによる、OBの為の会を標榜し、諸事進めて参りました。

第一部、総会は、12：00より、倉又の司会・進行により、まず河西郁夫会長挨拶、ご来賓の双日㈱土橋昭夫会長のご挨拶を頂戴し、双日の現況と展望をお話いただきました。

その後、橋本春彦世話人による2006年度収支報告、2007年度予算案の報告があり、会員の承認を経て、議事は終了した。

第二部、懇親会は長谷川洋世話人の司会で、冒頭、長老OB土橋久男さんのスピーチを御願いした。86歳の土橋さんの実に生き活きとしたお話し振りに後輩OB一同、大いに鼓舞されました。

乾杯の儀は、廣田雄太郎さんに御願いした。皆さん、元気良く杯を重ねられ、また久し振りの邂逅を喜び合った。

中締めは、丸山修作さん。軽妙洒落なお話し振りに、会の雰囲気は、いやが上にも盛り上がりました。

昨年同様、時間が来ても立ち去りがたい人の輪が随処に見られましたが、またの出会いを期してお開きとなりました。

尚、総会の受付業務ほかで御協力いただいた一般会員OBのお名前を下記して謝意を申し上げます。

名 島 憲一郎	村 沢 醇 治	沖 本 達 也	幾 島 清	庭 野 松 三
高 瀬 允 宏	吉 木 健	牧 洋 生	植 木 弘 政	梶 山 俊 次
埴 生 栄 勇	岡 田 茂	星 合 良 彦	久 世 清 司	福 本 匡 純
塚 本 幸 雄				



挨拶

会長 河西 郁 夫

本日は昨年の7月13日にスタートした本会の第二回目の総会であります。生憎外は激しい雨の荒れた天気ではありますが、多数の会員の皆様にご参加いただき、このような盛大な総会が開催出来ました事は何より慶賀にたえない所で、厚くお礼申し上げます。双日（株）本社よりもご多忙の所、土橋会長はじめ人事総務部長の矢部さん、我々の会のお世話をして頂いている青木さんのご出席を頂き、有難く厚くお礼申し上げます。

さて、本日までの第一年度のこの会の活動、運営につきましては、設立総会の時に議決頂いた会則、事業計画、予算などにに基づき万事順調に推移致しました。特に会員の増加、人事の連絡、交流の輪の拡大、慶弔、同好会の支援、事務所の整備などに力をつくしました。ご承知の様に会報と会員名簿はこれまで2回発行して皆様のお手許にお届け致しました。この間、ボランティアで奉仕して下さいた役員の方には、大変なご苦勞をおかけした次第で、この機会に厚くお礼申し上げます。次に去る3日には大阪でニチメン大阪社友会が会長に就任された田淵さんを中心にして結成され、その設立総会が綿業会館で開催されました。田中元社長、双日土橋会長もご出席頂き、全部で260人もの方が参加され、大変盛大で熱気にあふれるパーティでした。これで懸案だった東西にニチメン社友会が出来ました事は誠に慶賀にたえない所であります。これからは東西の社友会がお互いに協力し、今後の発展を期したいと念願しております。皆様既にご高承の様に双日（株）の業績回復は目覚ましく、先に発表されましたが懸案の復配も実現され、今後の発展、拡大は各方面から大きく期待される状況になっております。この事は私達にとりましても誠に嬉しいニュースであります。これに関連して双日（株）よりは先日今後私共の社友会にたいし相当額の支援金を出して頂けるのご連絡がございました。申すまでもなく、この事は財政基盤の弱い我々社友会にとり大変暖かいご配慮であり、ここに衷心よりお礼を申し上げる次第でございます。

これからの第二年度の事業計画、予算などにつきましては、この会の一層の発展と会員の皆様にすこしでもお役にたつ様な仕事をするという趣旨から、双日（株）よりの支援金も予算に組み込み、意欲的なものを作る様に心懸けました。このあと担当役員よりその内容につき説明がございましたが、何卒宜しくご理解ご審議のほどお願い申し上げます。なお、役員人事につきましては、双日の石原常務がこの春の役員の異動で営業の方に異動されたため、我々社友会の副会長の方は辞任させて頂きたいとお申出がございましたので、やむなくそれに同意する事に致しましたので、この件につきましてはご了承をお願い致したいと存じます。

ご高承の様に我々のこの社友会は自立、自主による運営を理念とし、ニチメンに勤務していた人達の有志の集まりであります。その円滑な運営と発展は一にかつて会員皆様のご理解、ご協力によるものでございます。これから始まる第二年度におきましても、引き続き皆様の絶大なご支援をお願い致します。最後になりましたが、会員皆様の一層のご健勝とご多幸をお祈りして私のご挨拶とさせていただきます。どうも有難うございました。

以 上

ニチメン東京社友会 第2回総会 双日(株)土橋会長のご挨拶

皆さんこんにちは。双日の土橋でございます。

先週7月3日には大阪で「ニチメン大阪社友会」の設立総会が開催され、700人を超える会員がおられるうち、当日は約240名の方がお見えになりました。

本日の「ニチメン東京社友会」第2回総会には、約170名の方がお越しになられているとお聞きしており、このようなお元気な先輩方に囲まれ、私共も更に元気を出さねばと思っております。

さて、6月末に当社は定時株主総会を開催いたしました。

本日ご臨席の皆様方の中でも何名かはご出席いただいたと思いますが、2007年3月期決算をもって、念願でございました配当決議を行うことができました。

実に旧ニチメンでは7年ぶり、旧日商岩井では9年ぶりの配当であり、まずは皆様方に御礼を申し上げます。

一株当たり6円という配当額にはまだまだ満足しておらず、今期は7円、来期以降はこれを上回る金額で継続的に配当を行いたいと思っております。

このように当社の現状が極めて順調に進捗しているということを、胸を張って御報告できることを大変嬉しく思います。

振り返りますと、2003年4月にニチメンと日商岩井が経営統合し、翌年の2004年4月に両個社が合併して、双日として再スタートいたしました。

新生双日での最大の課題は、資産の健全化でありました。私共はこれに鋭意取り組み、いうならばB/Sの大掃除を一括で行いました。

その結果、4,000億円を超える赤字決算となり、関係者の方々には大変なご迷惑をおかけいたしました。

一方、これだけの赤字決算でございましたので自己資本も相当毀損し、これを補うために金融機関のご協力を得まして、5千数百億円の優先株式を発行いたしました。

資産の健全化に伴い発行した多額の優先株を処理(買入消却)してはじめて当社の再建が出来る、再建したと言えるのだ、という認識の下に私共は取り組んでまいりました。

そして、この課題であった優先株式への対応につきましては、昨年5月に買入消却の為の資金調達として3,000億円の転換社債(CB)を発行いたしました。

そして約1年間でCBの普通株式への転換が完了し、懸案の優先株式はこの原資をもって本年3月末で約4割を、そして本年6月中にさらに約4割を買入消却し、残りの2割は本年9月末に買入消却するということでございます。

結果的に当社が発行する株式数は、従来の約3倍の12億3千万株程度になりますが、優先株式を保有し続けるデメリットや将来普通株式に転換した際の株式価値の希薄化を鑑み、ここで優先株式を一掃することが当社の成長促進に繋がると判断したものでございます。

今期の決算ですが、第1四半期も順調に滑り出しており、今期の計画値は間違いなく達成出来ると確信を持っております。

それと同時に、私共が現在進めております中期経営計画「NEW STAGE 2008」の最終年度(2009年3月期)の計画値である、連結の経常利益1,000億円、当期純利益600億円も完全に手の届く範囲になってきたと思っております。

こうなりますと、株価はもっと上がっても良いのではと思われる方が多いと思いますが、株価につきましても私共は満足しているわけではございません。ただ、株価はマーケットに委ねるしかなく、私共に出来るのは、マーケットに約束した数値を着実に実績で示していくことであり、それが株価に必ず反映されていくと確信しております。

経営トップは積極的なIR活動、また地道な広報活動等により当社をアピールして参りますが、何よりも実績をきっちりと示していくことだと思っております。

このような会社の状況を鑑みまして、皆様方には今まで大変ご不便をおかけして参りましたが、会社からOB会への若干の補助という形で協力させて頂く事になりました。

この事実も、会社がこういう状況になってきたのだということをご理解いただける1つの事象ではないかと思えます。

今後もこの会が大いに発展していき、そのために私共の補助が些かなりともお役に立てればと思っております。

話しが長くなりましたが、外部環境も良く、会社は非常に順調に行っておりますが、何も問題がないとは思っておりません。

しいて挙げるとすれば、このような足下の状況に浮かれて私共経営が慢心すること、従業員もそうですがこの慢心することが、最大のリスクではないかと思っており、引き続き、緊張感を持ち、気を引き締めて経営にあたってまいりたいと存じます。

皆様方が、「私は双日のOBだ」ということを、胸を張って言えるような、そして誇りに思えるような会社にしていきたいと思っておりますので、皆様方のご支援を引き続き宜しくお願い申し上げます。 ありがとうございました。

以 上



長老代表挨拶

土 橋 久 男

土橋久男でございます。

指名でございますので、短く一言お祝いを述べさせていただきます。

このお話をしろという事は、世話人会の皆様の代表として、丸山さんから仰せ付けてきました。

仰せ付けられて私は聊か緊張したんですけど、丸山さんも 又ニチメンさんの中には、海軍が居りますけれども、海軍では上からどんどん仰せ付けてくると、下の方は「仰」と言う字が有りますが、これを手偏（「抑」）にしてしまうのです。

抑えつけられると言うのです。

何か命令を抑えつけられた感じで聊か戸惑っておりますけれども、短く申し上げます。

ニチメンさんというのは、明治25年、1892年の誕生でございます、その時に至る日本の姿と言うのは、今のイラクとかイランとか色々な国がございますね、あの混乱以上に大変な混乱でございます、ようやく落ち着いたのが明治15年でございます、その頃はも一、殖産興業で綿業で飯を喰おうと言う時でございます、それで綿花の輸入は粗方外商にやられていたんですね、それを兎に角日本人の手で奪い返すというのが、日本綿花でございます、ニチメンの前身でございます、24人の侍達が、関西の事業人が集まりまして、そして外務省の書記官の若い佐野常樹さんが社長になりまして発足しました。

然し、商品自身は皆さんご存知の通り大変難しい商品で、モ一何時も大きい問題が起きるということで、昭和5年には到頭大欠損で会社はもう破産の様な状態になりました。

その時に、横浜正金銀行の確か児玉頭取だったと思いますが、ニチメンと言うのは国家的な会社であると言う事を一言大蔵省にいいましたので、それで大蔵省もその通りだと言う事で、存続になったと言う事です。

業績が悪いので、人も採用できず、人も居ないと言うことで、戦後になってドット昭和22年に入った方が我々のグループでございます。

昭和30年代には質量共に、男女共に、素晴らしい人がどやどや入って来られまして、40年、50年と素晴らしいお仕事で、総合化が達成されたと思います。

ズート通して見ますと、昔からの先輩が言っておられましたように「オールインワン」と言うスピリットがですね、ズート通って居ると思いますね。

「皆んな何時も一緒だ」という事です、今日の会合も幹事の皆様のお骨折りで、この沢山の人が集まられて、色々報告やらお話を伺いまして幸いでした。

以上を持ちまして私のお祝いの言葉に代えます。 有難うございました。

..... 拍手



2007年度事業計画

(期間：2007年7月1日－2008年6月30日)

ニチメン東京社友会

主として下記事業を行う。

	当期予算 (千円)	前期実績 (千円)
1. 総会の開催	2 2 0	3 3 3
2. 新年会の開催 (新規)	5 7 0	0
3. 会報・会員名簿の発行	8 0 0	7 5 9
4. ホームページの運用	1 4 0	1 0 7
5. 会員の慶弔 (慶事は新規)	3 0 0	1 1 4
合 計	<u>2,030</u>	<u>1,313</u>

2007年度収支予算

(期間：2007年7月1日－2008年6月30日)

ニチメン東京社友会

A) 収入の部

	当期予算 (千円)	前期実績 (千円)
1. 年 会 費	1,800	1,761
	(600名)	(587名)
2. 双日本社補助金 (新規)	1,800	0
3. 寄 付 金	200	447
4. そ の 他	0	112
計	<u>3,800</u>	<u>2,320</u>

B) 支出の部

1. 総会の開催	2 2 0	3 3 3
2. 新年会の開催	5 7 0	0
3. 会報・会員名簿の発行	8 0 0	7 5 9
4. ホームページの運用	1 4 0	1 0 7
5. 会員の慶弔	3 0 0	1 1 4
6. 世話人会運営費用	3 6 0	1 8 7
7. 事務所運営費用	1 0	—
8. 雑 費	1 0	1 0
9. 予 備 費	1 0 0	0
計	<u>2,510</u>	<u>1,510</u>

C) 差引当期分繰越金 (A－B)	<u>1,290</u>	<u>810</u>
D) 前期繰越金	810	0
E) 当期末繰越金 (C＋D)	<u>2,100</u>	<u>810</u>

2008年度社友会『新年賀詞交換会』開催ご案内

社友会では、通常の7月の総会・懇親会に加えて、新企画として新年会を下記の要領にて、催す事になりました。

OBの皆様が、お元気に新年を迎えられた歓びを共有し、明日への活力を得られるように一堂に会したいと存じます。

非会員の方で入会ご希望の方もお誘い下さい。

当日会費は要りません。

軽食と飲み物を用意します、万障お繰り合わせの上、ご参加ください。

記

開 催 日 ; 2008年1月18日(金曜日) 12:00～14:00
会 場 ; 双日(株) 本社、西館7階 会議室
アクセス ; <港区赤坂 TBSビル向い赤坂国際ビル>
<東京メトロ千代田線赤坂駅下車5番出口を出てすぐ>

会 費 ; 無 料

尚、軽食及び飲み物を用意致しております。

- 特記事項 ;
- 双日(株)首脳部のご参加も予定されてます。
 - 長寿の表彰、米寿及びそれ以上11名、白寿の該当者なし
 - 社友会役員人事一部変更、世話人の増員ご紹介
 - 受付に社友会入会申し込みの窓口を設置します、
非会員の方で入会ご希望の方は2008年度年会費3000円ご持参ください
 - ニチメン大阪社友会より、会報創刊号及び会員名簿をご提供いただいております。
- 数に限りがありますので、先着順にさせていただきます。

双日(株)内、社友会担当窓口 ; 人事総務 ; 青木 聡弥氏
03-5520-4088

以 上



ニチメン大阪社友会、設立総会・懇親会開催

ニチメン大阪社友会

平成19年7月3日(火)設立総会・懇親会を会員出席者231名。それに3名のご来賓を迎えて、開催致しました。

○ 設立総会

11時半、尾子 明世話人の進行で冒頭、物故者のご冥福を祈り黙祷、次いで田淵弘通会長から以下の挨拶、会の趣旨説明がありました。

「長月会解散後4年が経過し、その間ニチメン全体のOB会を結成しては、との声が聞かれるようになった。双日㈱からの強い要請も受けて、先ず東京社友会から立ち上がり、次いでこの大阪社友会も有志27名が一体となって作業を進め、本日の総会を迎えることが出来た。新OB会はかつての長月会とはコンセプトを異にし、①独立の組織であること ②自主自立が基本方針 ③OBの、OBによる、OBのための楽しいOB会、を志向する。」

次に、議事に移り、会則、役員人事、今年度事業計画案、同予算案の審議に入り、原案通り全て可決承認。

○ 懇親会

林 靖世話人の司会で①双日㈱代表取締役会長・土橋昭夫氏からの会社の現況報告 ②早瀬三郎さん、河西郁夫さんの祝辞を夫々頂き、田中義巳さんの発声で乾杯。

一会場では入りきれず二会場に分かれての懇親会は盛会でした。長月会が解散して4年が経ち、その間、地域毎、部門毎、年次毎、或いは趣味を同じくする同士の同好会的会合など、いろいろな集いが持たれてきましたが、これほど多くの人が一堂に会するのは久しぶりのことでした。

東は東京・埼玉・静岡・岐阜、北は福井、西は福岡・広島・岡山等、遠方から広範囲の参加者を迎え、会は大いに盛り上がりました。懐かしい人の顔、久しぶりの再開を喜び合う方々、美しい交歓の風景があちこちで見られました。

高橋 正・副会長の中締め後もその場を去りがたく、別れを惜しんで語り続けられる姿も見かけました。この姿を拝見し、我々世話人のこれまでの苦労も本当に報いられた思いがしました。

このたびの盛会で大阪社友会も誠に幸先の良いスタートを切ることが出来ました。然し、何といたっても未だスタートしたばかりです。今後、会員の皆様方のご協力を得て、未長い本格的な活動を続けて行かねばなりません。その決意をこの際、新たにした次第です。

以 上

NYNYNY = 大阪ニューヨーク会開催 = NYNYNY

関西在住の米国ニチメン・ニューヨーク店勤務経験者を中心に、今では米州各店勤務者も含めて毎年一回懇親会を持ってきた由。

今年は、10月27日、大阪グランドホテルにて開催。長老の岩田宣治さん、田中義巳さん、野村喜久雄さんはじめ約40名がご参加された。

遠くハワイからは松村信男さん、ロスからは山崎さん、また名古屋の浅井吉彦さん、東京からも会員が、馳せ参じた由。

NY会の登録会員数は78名を数えている。

特に会長・世話役を決めることなく毎回入社年次ごと順番に幹事役を務めている由。

(以上 文責 編集部)

BRICs 特集

BRICs、ご承知のごとく、ブラジル、ロシア、印度、中国の新興経済国の ACRONYM で作られた言葉である。

2003年に、ゴールドマン・サックス（U.S.A.）のインド人女性社員が投資家向けに書いたレポート、題して、“Dreaming with BRICs ; The path to 2050” で初めて使われたそうだ。

世界人口の42%、国土面積で29%を占めるこれらのBRICs諸国に嘗て、駐在したニチメンOBに、これらの国についての回想と今の思いを一筆御願いしました。

（編集部）

躍進するブラジルと還流する日系コロニア

元サンパウロ駐在員
篠 塚 美 郷

最近、長いことブラジルに住んでいる友人から、やや興奮気味の便りが届いた。

「ドル安レアル高で 2003年の1レアルUS\$0.28が現在ではUS\$0.50。レアル通貨の価値が2倍になった。2003年に借りた借金が半分払えば清算できる。企業は往年の半額で資本財や機械設備を購入できる。国内には輸入品が溢れ半額で物が売られ消費者にとっても安くてよい品が手に入るのだから良い。国産品の価格も抑えられ、インフレにはならない。

夢に見ていた海外旅行や外国留学も手の届く所まで来ている。外国の最新鋭の医療機器も購入しやすくなり、難病治療もチャレンジ出来る様になった。

インフレは先進国並に落ち着き多額の外債で悩むこともなくなった。

有史以来、初めて債権国の仲間入りし、為替も変動性に移行出来る時期が来た。

食糧、鉱物資源は中国やインドの需要増でレアル高にも拘わらず、輸出額は増え続けている。レアル高は総じてブラジルにとってプラスだ。」

私は1973年始めにサンパウロに赴任したが、当時でもブラジルは製鉄業、自動車産業、石油化学工業を中心に急速な工業化を推進、欧米、日本からの大型投資と企業進出が殺到していた。自動車生産ではVW, GM, FORD等が現地生産を開始、年間100万台を目指すところまで行っていた。政府も広大な領土と鉱物資源や農業資源の豊富さから、将来の「可能性」を謳い、20世紀の末までにはアメリカに追いつき追い越せと煽っていた。

それが、その後の長い混乱と衰退。今度こそは本物か？ いつまで続くか？

元来、一般のブラジル人は誰も国のやることを信用しない。政府権力者の汚職や経済政策の未熟さから、慢性的な高インフレに慣れっこになった消費者は、現金を手元におかず、換物主義に走り不要不急のものまで買い込むか、ヤミの外貨に交換するかの自衛手段に走る。これが更なるインフレを煽り、通貨価値は毎週のように下落し、国の対外債務は膨れ上がる。

ブラジル人は「ピアダ」といって小話が大好きだ。よくこんな小話で憂さ晴らしする。

ある時、隣国のボリビアから海軍大臣がブラジル大統領を表敬訪問した。

大 統 領：「貴国ボリビアには海がないと承知していますが、海軍大臣がおられますのか・・・？」

すると、海軍大臣がすかさず、やり返した。

海軍大臣：「貴国ブラジルにも大蔵大臣とやらが、おられるそうですねエ・・・？」

1. ブラジル進出ブームの到来

ブラジルでは革命軍事政権が1964年から約20年間続いたが、1970代の前半にはインフレも収まり、未だかつて無い10－14%に達する経済成長が続いた。

日本では60年代の高度成長と71年のニクソン・ショックによる円高で海外投資が容易になり、72年には経団連の植村会長、土光副会長をそれぞれ団長、副団長とする経済使節団が訪伯、帰国後、会員会社にブラジル投資を勧めた。これを機に、ブラジル進出がラッシュ化し、中小企業にまで広がった。日本国内では、連日のように、銀行が関係企業を集め投資説明会を開催、ブラジル進出を煽った。70年代前半だけでも400社以上の企業が進出した。また、日本政府を巻き込んだ大型National Projectsが締結され、関連企業に加え、政府系金融機関からも出資・融資で足並みを揃えた。

いわゆる「草木もなびく一大ブラジル進出ブーム」が発生した。

2. ニチメンの動き

ニチメンもごく多分に漏れず、この機運に乗るべく全社的に動いた。

1955年にサンパウロ事務所を開設以来、綿花の買い付けを中心に商権を築きつつあったが、1971年、金田取締役を団長に、機械プラント、食糧、化工、木材部門を構成メンバーとするミッションを派遣、ブラジルを投資市場として有望との結論を持ち帰った。

これを契機として、機械部門の鉄塔製造—JST、化工部門の工業油剤製造—YDB、食糧部門のオレンジジュース製造—サンダーソンなどのJoint Venture企業が誕生していった。

この流れを受け、1973年、岩田昭二支配人が着任、駐在員、現地スタッフの陣容も一新した。最盛期には、サンパウロとリオデジャネイロに拠点を置き、機械プラント、化工、鉄鋼、食糧、繊維、開発、J/V管理、経理総務部門から駐在員を配置し、その後の全社的な大型投資ミッションや毎週のように押し寄せる内地本部個別の調査ミッション、出張員などを受入れ、投資機会を求めてブラジル各地を飛び回った。

3. 二度の石油ショックとブラジル経済の大混乱

1973年10月に発生した第一次石油ショックで、国際情勢は急変していった。

当時ブラジルの石油生産の自給率は30%に満たなかった。大部分を中東から輸入していた。石油輸入のため鶏肉や穀物・食糧を大量に輸出したが、石油価格の暴騰に追いつけず、

1970年代の後半にかけて、海外からの投資減少、貿易収支の赤字、対外債務の増大に陥り、輸入規制、海外旅行制限などの大統領令を連発した。

一方、この状況にも拘わらず、ガイゼル大統領とデルフィンネット蔵相は National Projects では積極政策を変えなかった。イタイプ発電所建設、ツクルイ発電所建設、カラジャス鉄鉱石開発などの推進で輸入代替効果、輸出増、国庫歳入の増加により危機を乗り切れると期待した。

然しながら、79年の第二次石油ショックでは外債金利の上昇、国債の大増発、80年代の停滞によるHyperinflationからMoratorium、90年代の大破局へと突入していった。

石油はブラジルのアキレス腱であった。

4. 日系進出企業の撤退

1970年代の後半、日本国内ではブラジル嫌悪症が広がった。理由は2回に亘る石油ショックに起因したブラジル経済の大混乱に嫌気がさしたためである。多くの場合、ブラジル側の合弁相手に恵まれず、意思の疎通も不十分で上手くいかなかった。

70年代に進出した日本企業のうち、百数十社がブラジルでの事業展開に見切りをつけ撤退していった。ニチメン関係でもサンダーソン倒産、JSTは官公需予算の極端な削減のしわ寄せを受け、受注契約の減少と金利高騰に見舞われ、撤退を余儀なくされた。

今や、1955年代に進出した日本企業の象徴的存在であった、イシブラス（IHI造船所）、紡績会社、1970年代にBAHIA州カマサリ地区に大挙して進出した日本の石油化学工業は全て資本を撤収してしまっている。

1990年代の後半、日本の自動車関連企業が一部進出したが、大きな勢力にはなっていない。新日鉄のウジミナス製鉄所もつい最近までは資本比率も低下、小株主に留まっている。資源大国ブラジルを前に、その時々の政治、経済情勢に振り回され、大きな根を生やしている進出企業は極めて少ない。

5. 日本人のブラジル移住

来年2008年は日本人のブラジル移民100周年である。1908年、神戸港から791名の農業移民が「夢の大地」をめざして海を渡っていった。

当時、排日運動でアメリカ、ハワイへの移民が行き詰った矢先、ブラジルに未曾有のコーヒー・ブームが沸き起こった。1888年、ブラジルの奴隷制度の廃止で農場労働者の不足から日本移民にブラジルという「希望の星」が現われた。日本は海外移住を国策として、皇国殖民会社が渡航費を支援し、ブラジルにはコーヒーという「金のなる木」があると、移民を奨励した。

以来、一世紀に亘り、日本人移民は言葉も生活習慣も異なる地球の反対側で、太平洋戦争下の敵国国家日本、外国語新聞 雑誌 教育の禁止、日本の敗戦と勝組み負組みの抗争と混乱の辛苦に耐え、天災 旱魃 霜害 飛蝗の大群などの被害を乗り越え、ブラジル農業の発展に貢献してきた。現在、日系ブラジル人は一世から五世まで含め150万人に達し、ブラジルは海外では最大の日系人居住国となっている。

ブラジルでは日系ブラジル人は真面目、勤勉で、「ジャポネス ガランチード」と極めて信頼が高い。これは農業分野での100年の流れの中で、苦闘の努力の結果である。

6. 還流する日系ブラジル人

歴史の不思議とでもいうのか、この100年の間に日本人が25万人ブラジルに移民し、その子孫が31万人帰還している。何れも「出稼ぎ」であり望郷の念にかられた人達だ。

何年か働いてお金を貯め、「故郷に帰るのだ！」と、辛い仕事にも耐えている人達だ。

どうしてこのような状況が起こったのか？

1908年の笠戸丸以来、日本、ブラジルの国策や準国策と経済の浮沈に流されながら、盛と衰を繰り返してきた。60年最後半から70年代前半にかけての未曾有の好景気、

70年代の第一次、第二次石油ショックによる高金利と対外債務の急増、80年代のハイパーインフレとモラトリアムによる大混乱から90年代の大破局へ突入という流れに翻弄されたのである。

日系ブラジル人は自身を「日系コロニア」と称して来たが、日系コロニアの牙城であった

コチア産業組合、スール農業組合、南米銀行などが破綻し、数万人もの大量失業者が生まれた。荘・青年層への影響は大きく、組合員、従業員、銀行員、その家族が大挙して日本に渡った。ブラジルの一流大学卒の管理職者が日本の町工場の職工となり、「出稼ぎ」せざるを得ない状況に追い込まれた。

笠戸丸以来、先人たちが一世紀をかけて築いた「コロニアの城も砦も」全て失い落城した。

一方、大移動が始った1985年頃の日本では、建築ブームと製造業の拡大による労働力不足が深刻になっていた。日本政府の日系ブラジル人二世、三世とその配偶者に対する優遇滞在ビザの発給で、多くの日系ブラジル人が容易に来日できるようになった。

還流日系ブラジル人の就職先は自動車部品工場、電機機器工場を主体に色々な業種に亘り、愛知、静岡、群馬、神奈川、広島、岐阜などの集住地域から北海道に至るほとんど全国に広がっている。

現在、多くの日系ブラジル人は派遣契約による単純労働のため、低賃金と日本での生活費の上昇で蓄えを減らしており、ブラジル通貨レアル高という現象から、「稼いだ金を持って帰る」という夢は破れ、やむを得ず、「日本での定住化」を考え出している。

そして多くは不利な雇用契約のもと社会保険や健康保険の未加入、子どもの教育と進学、日本社会への同化という切実な問題に直面しつつある。

7. 日系ブラジル人支援のための活動

私のブラジルとの関りは高校二年生の時、県の高校英語弁論大会に「移民の重要性」というタイトルで参加したことに遡る。当時は、戦後日本の急激な人口増加、食糧難、就職難などの社会情勢から、日本政府も南米移民を国策として奨励していた。大学でポルトガル語を専攻、縁あって日綿実業に入社、幸い会社の配慮もありブラジルでの駐在生活を経験、現地の日系コロニアの実態に接する機会を得た。その好から、私は現在、「NPO・日系ブラジル人を支援する会」に加わり、各種交流行事の企画・運営、学校訪問、窓口相談などの支援活動を行っている。

本年5月、在名古屋ブラジル総領事館の Geraldo A. Muzzi 総領事に同行し、愛知県豊田市役所と市内の保見団地内の小学校を訪問した。副市長の説明では 現在、42万人の市人口の4%、16,800人が外国人居住者、このうち約半数の8,400人がブラジル人。豊田市は国内最大級のブラジル人集住タウンとなっている。

日系ブラジル人は日本語も充分理解できず、生活習慣も分らず、日本人地域社会との摩擦が日々絶えない。多くは夫婦共働きで仕事も不安定なため、教育まで手が回らず子ども達は放置されがちとなっている。生活費の上昇で崩壊寸前の家庭も増えて来ている。学校ではいじめの問題もあり、子ども達は不登校から非行化し、犯罪に巻き込まれるケースが多い。因みに、久里浜少年院の収監者の40%が日系ブラジル人の子弟という現実がある。このまま放置すれば、将来への夢も希望も持てない無気力な青少年が溢れ、日本社会の不安定要因になりかねない。

行政当局も総領事館と共々「ブラジル人とコミュニティとの共生」を目指し、地域の国際交流団体やボランティアの参加協力を得て、いろいろな施策を行っているが、相互のコミュニケーション不足もあり十分な成果があがっていない。

手遅れにならないうちに、有効な対策が望まれている。

最後に、豊田市からの帰途、Muzzi 総領事が冗談混じりに発した一言：

「在名古屋ブラジル総領事館には毎日7人の新生児の登録がある。」

日本の少子化問題はブラジル人に任せておけば解決できる。」

次の100年、これら日系コロニアの子孫はどんな歴史を辿るのだろうか？

(完)



「泣く子も黙るKGB」

元モスクワ駐在員 谷 昌 興

あれは、確か1965年（昭和40年）の暮れも押し詰まった冬のモスクワ。夏場の「日本産業見本市」および引き続いて開催された「ソ連国際化学見本市」アテンドのための初めての長期出張の後、本社より受け取った一片の辞令は「長期出張を駐在に切り替える」というものでした。

予想外のサプライズ辞令に、冬支度などしてきていない私は、毎日震えながら留守宅からの冬衣装の到着を首を長くして待っていた、その頃の出来事です。

当時ソ連では駐在員事務所は正式には認められておらず、わが社は同業他社同様ホテルのデラックスルームを借り切って仮事務所とし、駐在員（正式には頻繁にビザを切り替えての長期出張員）はそれぞれ同じホテルのシングルルームに居を構えていました。

初めて経験する“ロシアの冬”。夏場内地からの出張員やメーカーのお客さんであれだけ賑わったホテルもまるで潮が引いたように閑散。しかし、ビジネスはソ連の会計年度が始まる冬場こそわれわれにとっては刈り入れ時であり、内地よりのお客さまアテンドに惑わされることもなく貿易公団との商談に集中できる時期でもあるのです。しかし、外気は常にマイナス20度以下、朝は10時にならないと明るくならず、午後3時を過ぎればもう暗くなるという毎日で、気分的には鬱陶しいことこのうえありません。わが社が事務所を構えていた「レニングラードホテル」は通称「トゥリョフバクザリナヤ・プローシャチ（3駅広場）」の一角に建つ22階建ての尖塔ビルで、3駅とはレニングラード（現サンクトペテルブルグ）へ行くレニングラード駅、シベリア方面に行くヤロスラブリ駅、中央アジア方面に行くカザン駅（モスクワでは行き先ごとに鉄道駅がある）のことで、それこそ鍋・やかんの類を背負ったおのぼりさんで絶えずごった返していました。その様子が戦後の上野駅に似ていることからわれわれは「モスクワの上野」と呼んでいました。事務所の窓から垣間見るダイヤモンドスノーに閉ざされた「モスクワのノガミ」の夜はさすが人影もまばら、ただ黙々と動く黒い点となって白い月明かりに照らし出されている光景にいかにも異国に来了という感を深くしたのでした。

そんな頃、私の身边に何となく異変があることに気づいたのです。まず、自室の電話が話中に急に声が小さくなったかと思うとプツンと切れてしまうのです。何度やっても同じです。てっきり電話が故障したと思ってホテルのマステル（営繕係）を呼んで見てもらいましたが、受話器は故障していないと言うのです。次にいつも愛想よく独り者の私の話し相手になってくれ、いわゆる“街のロシア語”の先生的存在でもあった「鍵番のおばちゃん（各階にいるフロアマネジャー）」の態度が何となくよそよそしく、ともすれば私を避けようとするのです。そしてレストランに行くと、前のほうに黒い背広姿の中年の男性が立ってこちらをじっと見ているのです。初めはレストランのマスターが給仕女性の差別をしているのかなと思って見ていましたが、レストランに行く度に昼も夜もその男性がいて私の方をチラチラ、チラチラ見ているのです。そして、やがて決定的出来事が……

貿易公団との商談にはタクシーを使って通っていましたが、私がホテル横のタクシー乗り場からスタートすると、隣の駐車場からほとんど同時にエンジンをかけてスーッと私のタクシーの後ろについてくる車がいるのです。それもいつも同じ青い色の車なのです。いろんな公団とのアポイントは殆ど毎日のようにありましたが、青い車の尾行は変わりません。かと言って私の車を止めようとするわけでもないのです。しかし、これだけ身の回りに異変があると、如何に鈍感な私でも夜の寝つきが悪くなり、昼間は気が散って仕事にも身が入りません。頼りとする先輩に相談しようにも、あいにく彼はビザ切り替えのためヘルシンキに一時出国中なのです。不安な気持ちが私をホームシックに追いやりました。

しかし、不思議なことにいつのまにか電話も普通に繋がるようになり、レストランの男性も、そして青い

車もパツタリ姿を消し「鍵番のおばちゃん」ももとの愛想を取り戻して、いつものごとく数分遅れのモーニングコールをくれるようになったのです。あれは一体何だったのだろーと思ひ返ししながら、内心ホッとした気持ちで過ごすこと数日、大晦日も真近い或る夜のベッドに向かおうとした12時前、枕元の電話が突然鳴りました。「私KS電機の技術部のAと申しますが突然失礼します。現在お正月休暇を利用してソ連を旅行中です。出発前に上司のOから頼まれて見本市で売却した炭素分析計のアフターサービス用部品を託かって来ました。しかし、困ったことになりました。Oさんからは何か困ったことがあれば、ニチメンの谷さんにコンタクトするようにと電話番号を教えてもらっていたのでお電話した次第です。」声が何となくうわずっている。私はただならぬ雰囲気を感じ取り、矢継ぎ早に問い返しました。「分かりました。それで困ったこととは?」「ところで、あなたは今どこにおられるのですか?」「ナショナルホテルというホテルのロビーにいます。玄関のドア越しに赤い広場が見えます。私のそばに警察の人が2人いて私を見張っています。実は日本からナホトカ経由シベリア鉄道でモスクワに向かっていたのですが、キーロフと言う駅で突然列車から下ろされ、部品をはじめ持ち物一切合財取り上げられました。いろいろ訊かれたのですが通訳の言葉がいまいちよく分からぬまま留め置かれました。3日後再び列車に乗せられようやくモスクワに着いたというわけです・・・。これ以上は今・・・」「ご苦労様です。で、あなたはこれからどうされるおつもりですか?」「さあ?私には分かりません。ただ部品類は返してもらったので、出来ればお渡ししたいのですが・・・」「・・・ちょっと待って下さい。すみませんが、いったん電話を切らして下さい。」私は部品をとりに行くべきか一瞬ためらったが、今ぜひ必要なものでもない。そんなものよりも現に拘束状態にあると思われるAさんの身柄を何とかしてあげねばならない。しかし、これは一介の新人商社マンには手に余る。私は先ず上司に相談することを考えましたが、もう夜も遅い。しばし逡巡の後、思い切って日本大使館の夜間緊急電話のダイヤルを回して当直の館員を呼び出しました。ことの顛末を簡潔に説明し、どうしたらよいかアドバイスを求めました。館員は直ちに「分かりました。あなたはこれ以上何もする必要はありません。部品も取りに行かないで下さい。あとは大使館にお任せ下さい。こちらでしかるべく対応致します。結果については後ほどお話しします。」大使館の方の的確な対応に安堵する一方、顔も見知らないAさんの身の上を慮って眠れぬままウトウトしかけました。と、その時ハッと頭にひらめいたのが、数日前までのわが身の異変。そうだ!このことと関連があるに違いない。つまりAさんの託った部品から私の居所、素性が割り出されて、直ちにモスクワに伝令が飛び、私が監視、尾行された。まさにその時Aさんはキーロフ(モスクワの約700キロ手前)で足止めを食い、厳しく尋問されていたに違いない。謎が解けたのです。幸いなことに秘密警察のトレースの結果はモスクワ、キーロフともにシロ。私に対する監視、尾行がなくなったとき、そしてAさんがモスクワにたどり着いたとき、ソ連サイドでは既に問題は解決済みだったのです。だからこそAさんは付き人の前で私に電話をかけることが許されたに違いありません。

年が明けて大使館での新年パーティーに招かれた1月4日、私はご迷惑をおかけしたおわびとお礼を兼ねてその後の経緯を聴くべく、参事官を探し出して丁重にご挨拶を申し上げ、さらに詳しい

いきさつをお聴きしました。つまりソ連当局の疑惑は晴れたが、Aさんは24時間以内の国外退去を命じられ、帰りのシベリア鉄道の乗車券以外殆んど現金を持ち合わせないAさんは、大使館で立替えてもらった航空券を手し、最寄りのヘルシンキ経由空路無事帰国しました。とのことであった。

それにしてもAさんは何故シベリア鉄道車中で拘束されなければならなかったのだろうか?参事官によれば、Aさんは窓外にえんえんと続く氷原や雪に埋もれた森林や河、停車駅では駅の様子などをパチパチとカメラに収めたり、朝、昼、晩と車窓から寒暖計を突き出して気温を計ってはノートに克明に書き込んだりしているところを、乗客に怪しまれ当局に通報されたらしい。と言うのです。

旬日後、Aさんからは無事帰国した旨の丁重な礼状とくだんの部品の小包みが託送便で届きました。東京ーモスクワ間往復16,000キロプラス片道8,000キロ合計24,000キロ、つまり地球半周以上もの長旅をした高価な?小包にはニチメンモスクワ谷駐在員様と上書きがあり、中身はシリコンチューブ、ガラス管、濾紙と言った実験用具類でありました。私はほろ苦い思いでこれらを受け取り、KS電機の炭素分析計が納入されている中央鉄鋼研究所に無事届けたのでした。

(終)

INDIA(1) “インド国鉄電化のこと”

林 義 人

私は1960年1月から1962年10月まで、カルカッタ支店に駐在した。

本来の仕事は当時既に進行していたインド国鉄の電化工事関係だったが、経理の近藤さんが帰国され、鳥巢さんが来られるまでは古谷野支店長の指示で経理も担当していた。

私の後のカルカッタ駐在員で、この会報編集責任者の長谷川さんから依頼があったので、電化工事とのかわりについて思い出しながら書いてみる。

(なにしろ古いことなので、前後の間違いや記憶違いがあると思いますが、ご容赦下さい。ご指摘戴ければ幸甚です。)

先ず、インド国鉄電化工事について簡単に説明すると、インド西北部の鉄鉱石、石炭の諸産地と諸製鉄所間の輸送の合理化を主目的として、50Hz・単相交流25KVの電化工事が、インド国鉄 (Indian Railways Electrification) によって計画され、SNCF (フランス国鉄) をコンサルタントとして展開された。ニチメン、BICC (英国) 及びSAE (イタリー) の三社が夫々の工区を担当し、ニチメンは第4工区 (Ramkanali - Manikui 間約70マイル、軌道延長約155マイル) で、このプロジェクトは終始日本国鉄の全面的なバックアップで進められた。下請は、ニチメンのビルマ・バルーチャン送電線工事で実績のあるマドラスの Crompton Engineering が起用された。

このプロジェクトは、調査、入札段階から竣工に至るまで古谷野さんのリーダーシップで進められ、その間数多くのニチメンの先輩たちが国内外で関与された。国内では、十亀さん、大竹さん、Purulia の現場事務所には矢吹さんと宇津木さんが頑張っておられた。私は、石川 (勝美) さん以外の駐在員の皆さんが住んでいた Rawdon Street の屋敷に、時期は前後するが、古谷野さん、近藤さん、富山さん、木村さん、宇津木さん、柳田さん、立松さん達と、まさしく合宿生活を送っていた。この屋敷の2階は、国鉄の皆さんの設計事務所として使われていた。電化室長の渡辺さんは国鉄の皆さんと一緒に住んでおられたように思う。

インド国鉄との契約は、スパン間のOHE (Overhead Equipment) 仕様毎の単価に基づいていたため、工事進行に伴い完了区間の仕様と実績を図面と現場確認で行いながら、工事価額を決定し、支払いを受けると云うやり方だった。私の行動範囲は、カルカッタのインド国鉄電化事務所、会計局、Adra と云う町にあった現地事務所などだった。時には、納期の遅れがちなフランスのサプライヤー (遮断器、断路器の Merlin & Gerin 及び架線金具の Luceat) への督促を手伝ってもらうべく、SNCF の駐在技術者に会ったりもした。日本調達の八幡のIビーム、古河電工、住友電工のトロリー線や日本碍子の碍子類は、ニチメン各部門の協力で問題なかったが、フランスは特にヴァカンスの頃大変困ったことが多かった。

朝日新聞の秋岡ニューデリー支局長が、プルリアを取材され、1961年3月2日号に写真をふんだんに入れて「インドで鉄道電化工事—国鉄の海外進出第1号」と云う記事を載せられたことがある。当然のことながら、「この工事は日綿実業が全責任を負っている」と書かれている。

訪問者で面白かったのは、当時の日本国鉄幹部で通称「トイレット博士」の藤島さんが来印され、インドの駅の便所の表示板が、男女の区別を表すのに、絵 (レリーフ) と英語とヒンディと州語で描かれているのを取材されたこと。このことを後でご本に書かれたようだ。

日本国鉄としては、初めての海外技術協力だったし、交流電化に関しては、それまで北陸線、仙山線の一部に敷設した程度に過ぎなかったが、優秀な技術者集団がインドに於いて蓄積されたノウハウが、東海道新

幹線を初めとする交流電化に生かされたと聞いている。国鉄からは当時の十河総裁や島技師長も来印され、アテンドしたのを記憶している。

電化工事は1961年5月に竣工、7月にインド国鉄への引渡し、1962年7月に保守指導と保証期間が完了して終結した。渡辺さんは、この間プルリア事務所に滞在され、重責を担われただけでなく、残存資材の処分もやって戴き、7月末に帰国された。私は、最後の兵卒として電化関係を締め、支店関係の引継ぎを終えて、10月に帰国した。帰国の途中、香港飛行場では香港支店長として着任間もない古谷野さんが態々会いに来て下さった。

1982年12月東京弥生会館で、「インド国鉄電化工事20周年記念」の催しが、国鉄、工事会社とニチメンの皆さん出席の下開かれた。ニチメンからは、古谷野さん、渡辺さん、矢吹さん、宇津木さん、大竹さん、十亀さんと私が出席した。

以 上

INDIA(2) “ジャパン・コットン(日本綿花)の昔より..”

長谷川 洋

1992年刊行の『ニチメン百年』に拠れば、原綿の直輸入交渉のために初代社長佐野常樹氏は、会社設立後、直ちにインドに出張されたと記されている。1893年には、ボンベイに駐在員を置き、その後、1907年には30数名がインドの奥地に入って、原綿の買い付けに当たったとある。

第一次大戦後の日本綿花のインド駐在員は約80名、現地雇員200名余とある。

1919年、原綿の買い付けの為、ボンベイより20キロ奥地に入り、原綿の買い付けに当たった駐在員Sさんは、当時まだ32歳、内地に妻子を残しての勤務であったと記されている。

当時、いかに困難な生活環境であったか、インド駐在通算7年の筆者には痛切に分かります。

偉大な先輩達のご奮闘の上に、今日の会社の存立があることを覚え感動した。

さて100年余のスパンのあるニチメン印度を語るには、スペースが足りない。

1962年、筆者が、初めて印度に駐在した頃は、上記のジャパンコットン物語はすでに伝説の中にあった。

前掲の林義人さん記述の“印度国鉄電化工事”が丁度完了した頃であった。

今日、日印経済協力の名目で、印度国鉄新幹線プロジェクトなどが俎上になっているが、ニチメンは半世紀近くも前に、印度のインフラ拡充・改善や、産業の近代化に貢献して来ています。

戦後貿易再開直後にインドの灌漑近代化の為にヤンマー・エンジンを大量に輸出した。その後、ヤンマー製品は機械部門の太商品として成長した。

ヤンマーはインドでは漁船の近代化にも貢献し、古野電気の舶用機器と相俟って漁獲高増加、とりわけエビの輸出に貢献した。

日本政府の円借款供与は昭和35年インド向けが最初であり、47年後の今日、インドが嘗ての中国を凌駕して、最大の円借款のDoneeである。

わが社は、かつて製鉄用ロール、農業機械、空港設備機械、電力庁向け設備等々の供給して来た。

タタ財閥総帥のラタン・タタが、ニューズウィークなどで、21世紀はインドの時代だと豪語はしているものの、インドは未だ国際的には日本の最大の被援助国である。

新聞・雑誌でインド特集が組まれITIndiaと喧伝されている。インドは、変わったと言われているものの、本質は何ら変わっていない。

1991年の経済規制・貿易為替の自由化は、自らの創意工夫と言うより、手持外貨が底を突き、DEFAULT直前に至り、世界銀行、日本の輸銀の援助の条件としての政策転換である。それが幸して、経済の活性化、印僑のインドへの回帰、IT産業の発展が今日のインドの経済的発展に繋がっている。

さて話を戻して、インド国鉄工事完了の頃、わが社は既に、これまた日綿にとっては初めての合弁会社であるはずのインド・ニッポン・ケミカル（INCC）

可塑剤工場を設立していた。その後に続く合弁会社に、インド・ニッサン・ケミカルの工業用アルコール工場、DIDPチェーン工場等が挙げられる。

その頃のインド日綿の布陣は、ニューデリーに野村喜久雄さん、倉又則夫さん、ボンベイには、東忠さん、大森啓作さん、故太田川努さん、松本信昭さん、カルカッタは、真保博一さん、柳田望さん、久保貞二さん、故江口健一郎さん、そして長谷川、マドラスは、橋爪寛さんだったと記憶します。

その後、皆さん、帰国後、再度アメリカとかドイツ、他のアジア地区に駐在員となって 出て行かれた。

わが社の重鎮になられた福井慶三さん、石橋鎮雄さん、満嶋啓二さんも遠い昔に駐在されたと当時、御聞きしました。

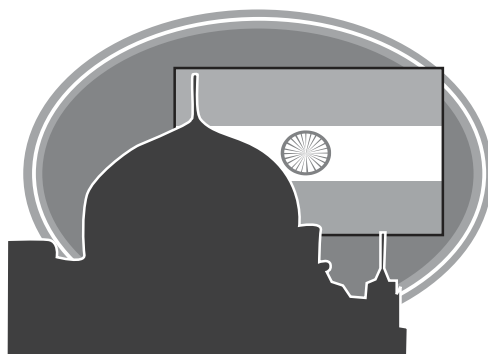
昔のインドを知る吾等インドOBにとっては、今日のインドは、まさに今昔の感がある。

この春、森元総理を団長とする日本の経済協力ミッションが、経団連代表合計80名を擁して、ニューデリーに乗り込んで来た。

大会初日、開会挨拶、大臣等の歓迎スピーチが終了すると、インド側財界代表がぞろぞろと退場し、最後のころには先方経済団体職員を10名足らず残すのみで、主たる財界代表は誰も居なくなつたと、報道されているのを読んで、小生は何の驚きも感じなかった。

日本側代表メンバーは、可なり憤慨して現地駐在員に文句を言ったようだが、THIS IS INDIAで、お変わりなくて、何よりです。

悠久のインドは変わらず。ガンジス河の水は今日も変わることなく流れている。



中国の思い出

福 原 昭 二

私の中国との関わりは、中国貨物船建造のアテンドに始まる。尾道の日立造船向島工場において1972年(昭和47年)12月より中国の技術者と起居を共にし、大田号の進水を見届けて1974年4月東京本社に戻った。安藤副本部長より、一度中国を見て来いといわれ、その年の11月、天津における関西国貿促主催の日本印刷・包装展覧会に参加し、これが戦後の初訪中となる。1975年、ダンボール設備のクレーム処理で北京へ。1977年、加藤トラッククレーンの技術交流で河北省の大港油田へ。研修者50名が対象というので、声がよく通るようにラジオとワイヤレスマイクを持ち込む。宿舎の風呂の蛇口をひねるとお湯の代りに泥水が出て小エビが泳いでいた。2週間の技交を終え新僑飯店のニチメン北京事務所に戻る。

その頃、繊維関係の商談は東華門へ、機械・金属・食糧関係は二里溝の商談ビルへ出かけ、各会社の担当者と面談する。業務連絡は電話と電報。電話はすべて交換台経由。受話器の精度がイマイチで、北京市内でも聞こえないことがあり、他社に聞かれたくない用件でもつい大声で話すようになる。夜になると電文を持って各社相乗りのタクシーで、日付の変わらぬうちに電報大楼に駆けつける。食堂では駐在員7～8名がテーブルを囲む。呉越同舟であるが情報交換の場でもあった。

この頃、中国の若い人たちの間で大学入試が話題になっていた。受験者の年齢を問わないと言う事で、文革で勉強できなかった青年たちへの配慮だったと思われる。乗ったタクシーの運転手も時間待ちの間、精華大学の試験問題集を読んでいた。彼は解放軍に居た5年間のブランクがいたい、現役には勝てないだろうが折角のチャンスだから、と言っていた。暫くしてホテル食堂の女性従業員が合格したとのニュースが流れた、退職して大学の寄宿舎に入るといふ、これはもう彼女の出世物語として語られていた。

1979年、IHIセメントプラントの商談が始まるので民族飯店に移動し、8階に部屋を確保した。民族飯店は民族文化宮という少数民族のセンターと隣り合わせであり、天安門広場から長安街を西へ4キロの地点にある。此处を根拠地として二里溝の談判大楼(商談ビル)に通う毎日が始まった。商談窓口は中国技術進出口総公司、ユーザーは中国建築材料工業部である。まず技術公司から中国文の契約その他の草案が渡される。目を通して見ると、大体五、六人の手書きである。夫々筆跡は違うし判読できない文字も出てくる。その都度年配の服務員に聞いたものだ。“ 電腦” 以前で手書きとタイプライターが大手を振るっていた。

民族に移って間もないある日曜日、張と言う中国人があなたを訪ねてきたと連絡があった。1階に下りて総服務台(サービスカウンター)に、彼はNHK(日本放送協会)の中国向け放送の視聴者でぼくの友人だ、と説明し、やっと面会の許可が下りた。部屋で張君が家族の話をしている最中、「福原先生、今日はいいい天気ですね」と、いきなり話を変えるので面食らった。彼の視線を追ってやっと気づく。部屋の入口で箒と塵取りを持った服務員が掃除のフリをして聞き耳を立てている。そこで暫く気候の話をしていると、その新入りの“坊や”然とした服務員は立ち去っていった。中国は外国人との接触を警戒していることを初めて知った。この後、ある民主活動家が盗聴され反逆罪で逮捕されたのはこのホテルだったと聞く。民衆は盗聴の事実をしっていて、人に聞かれたくない話は室内ではラジオをかけながら話すのである。

翻訳の仕事が終わって寝酒用の氷を貰いに服務台に行く、たいてい10時過ぎである。すると時には“偵察”依頼らしい電話がかかってくる。誰々が何時ごろ8階〇〇号室を訪ねているが、まだ帰っていない、この時間まで何をしてるのか見てこいというような内容らしい。電話を受けた者は、魔法瓶を持ってその部屋に向かう。部屋に入ってお湯を取替えずいでに中の様子を見ようとするのであろう。総服務台では入館者氏名、面会人氏名、退館時間を記録しているから、この締切を急ぐことも考えられる。こういう電話は人前では伏

せるものだと思うが、大きな声だから筒抜けである。

夏の熱い夜、寝ようかと思っていたら、“坊や”がやってきて、皆がお待ちしていますという。行くとサービス台の裏側の部屋で酒盛りが始まっている。この日親分の政委（政治委員）がいないらしく、みな和やかな表情だった。年かさの“和尚さん”（の様な風貌）が「先生、オレ達の酒も呑んでください」と言って注がれたのは「二鍋頭」だった。純度の高い高粱酒（60～70度）で、北京の名物だと聞いていたが呑んだのははじめて。口の中が痺れるような感じである。ほぼ同等度数の茅台酒のまろやかさには及ばないが、呑んでいるうちにいい気持ちになってきた。おかずは夕食に出た肉団子ともう一品。残り物かと思ったが、彼ら用に調理されたもの様であった。そのうち和尚さんのメートルが上がってくる。何かしゃべっているのだが、全く聞き取れない。皆も黙って聞いている。お礼を言って寝たのは午前1時だった。次の日に聞いてみると、和尚さんの言葉は地方の方言だから我々にもわからない。昨夜はどうも自慢話らしいが相槌を打つわけにも行かず、聞いているよりほかはないと言っていた。因みに、地方出身者にとって北京語はよそ行きの言葉である。だから異なる地方の者同士が結婚すると夫婦喧嘩のときは生まれ育った土地の言葉になる、お互い相手がなにを言っているか分からないまま怒鳴りあい、そのうち疲れてきて収まるのだと言っていた。

セメントプラントが成約してから、土木・機械・電気の三部門の設計会議が続く。ユーザー達は天津から来て接待所に宿泊していた。時々料理店に誘って氣勢を上げていた。彼らのうち年配者は一様にその日の天候に敏感で、病気を極端に警戒していたように思う。ぼくは自分で厚着だと思っていたが、そんな薄着だと風邪を引く、といわれたものだ。土木の会議が終わる前、責任者らしい年配の人がやってきて、お別れの前に一言お話ししておきたいと言う。「わたしは若い頃貴方と同じようなタバコの吸い方をし、酒を飲んでいた。その結果同時に三つの病気を患い、病院（西洋医学）を廻ったが断られ、最後の北京中医院（漢方医学）で、毎日規則正しい生活を続け、朝昼晩の三度必ずジャスミン茶を呑むよういわれた。これを5年続けてやっと現在の健康を取り戻した。」と言い、歳をとってからでは遅いから、今のうちに禁煙し、酒はよく食べてから少量呑むように、ジャスミン茶を続けてください、と言われた。ぼくは病気の方を詳しく聞いたかったが、親切なアドバイスを感謝した。ちなみに13年後の1992年、自然気胸を手術し即禁煙。そして1997年には胃癌の手術。せっかくの助言を実行しなかった報い、バチがあたったのだとだと思っている。

個別の案件で地方の工場を廻って見ると、幹部の子弟が民衆に嫌われていることが分かった。安徽省の合肥（省都）へ印刷機械の試運転に行ったときのこと。休憩時間に工員二人が印刷用ビニール布の原反の上に座って煙草を吸っている。座ると布の表面が歪むから印刷不良になると注意したところ、しぶしぶ立ち上がったが、現場の班長の言う事も聞かない風だった。その日の午後、外事科の副主任から話を聞く。あの二人は幹部の息子なので上司の言う事を中々聞かず、規律を乱して困っている。クビに出来ないことはないが、そうすると今度は街に出て悪いことをする。結局また工場で雇うことになる、と言っていた。

大慶アクリルプラント商談では、我々の陣営に高級幹部（閣僚クラス）の娘がいた。情報収集のためである。現地でテクネゴが行われたが、その休憩時間のこと。彼女アクリル工場長に向かって、「親が偉いなど関係ないでしょう、そんなに規律を乱すような者をどうしてクビにしないの?」、工場長「おっしゃるとおり、でも貴方には分からないでしょうが、クビにすると後から陰湿な報復がやってきて仕事に影響する。配置換えが精一杯です」と言っていた。どんな報復?と彼女は聞いたが、それには答えなかった。これらの子弟は高給を貰って仕事は適当だから当然職場の士気に影響する。これは影の大きな問題だというのが当時の現実だった。しかしその後、競争原理が導入され着実に浸透し、今では特権階級の子弟はダラ幹同様即刻解雇されるそうである。現在の中国発展の一因となっているかもしれない。

特に最近、中国の食品は危険だと世界各国から報道されている。先日北京ツアーから帰った友人は、ガイドから、ホテル以外での飲食は厳禁、浄水器以外の水は飲むなと言われ、窮屈な思いをしたそうである。

初めて北京入りして以来、食べ物でお腹を壊したことは一度も無く、危険を感じたこともない。セメントプラントの頃、建材部副部長（副大臣）からドライフルーツを食べないように注意された。理由は、中国はまだ不衛生だから、食べると肝炎になる。肝炎になったら治らないとのことだった。中国人から注意されたのはこれ一度だけ。その頃は10年続いた文革が終わり、世の中も人々もやっと平穏を取り戻していた。日本戦後の一時期もそうであったが、一般民衆の食べ物はまだ粗末で貧しかった。そのせいか、冬になるとみんな重ね着をして着膨れしていた、その上に部厚い外套を着るから後から観ると男女の区別はつかなかった。しかし食べ物のせいで問題が起きたと言う話も噂もなかった。新僑飯店近くの崇文門に大きな大衆食堂があった。いつも大勢の客で込み合っており、あの騒々しさにはまいったが、値段は安く味もそこそこで、これで十分だと思った。テーブルの大小のお皿はきれいに食べつくされ、残り物と言えはお碗の底にスープがわずかという程度、見事なものだった。ただテーブルの上と床は食べ散らかしが散乱し、これもまた壮観だった。その頃、ある社員が街の食堂でうどんを食べたという。食べ終わって席を立とうとしたら、周りの中国人から、何故残すんだ、全部食べてゆけ、と咎められたという。年とともに食生活の向上を実感してきたのに、この評判の悪さ、政府も手が廻らぬようだ。

在勤中ご教示いただいた安藤専務、宮本副本部長お二方と、現地滞在中お世話いただいた松村、濱本、工藤、山本各位に対し厚く御礼申し上げますと共に、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

『インドシナ今昔譚』

Part - 2 - 「懐かしき越南・第二の故郷」

久 澤 克 己

ベトナムに通い詰め

「日米」、「日中」をはじめ、日露、日印、日韓、日欧、日伯など多くの「日X」なる、二国関係表示が多用される中で、「日越」も今2007年、ぐんと市民権を得てきた感じがする・・・

(一) 今、驚いているのは、ドイモイから、僅か20年ぐらいいでのベトナムの急激な進化で、アジア通貨危機を乗り越えて今世紀に入ってからの変容と発展ぶりも小生の予測を超えていて、フォローするにも愚図愚図していられないという気分だ。中川十郎社友の依頼で、山邑社友と一緒に「ベトナムのポテンシャルティ」の講演をする機会があったが、演題は「躍進するベトナムの・・・」と付け変えさせられた。確かにGDPの伸びが05年8.43%、06年8.17%、今年の予測が8.5%というのはアジアでも唯一、中国に次ぐ高水準であり、同期間の外国投資額が68.4億ドル、102.1億ドルと、87年の受け入れ開始以来の記録を塗り替え続け、今年の予測は計画大臣の国会常務委への報告で、200億ドルを越えるとの発表を聞けば、まさに「躍進する・・・」と言える勢いである。

この今年の増加予測額の半分は、台湾のCompellやFoxconnといった世界最大級の由の電子製品メーカーの工場進出だが、日本、マレーシア、米国勢なども負けていず、いずれも5－10億ドル単位の高級ホテルやオフィス、国際会議場などの複合施設建設やリゾート・観光開発案件などを目白押しに押し込もうとしている。

この上に、ヅン新首相はハノイーホーチミン間の新幹線建設に、南北1650キロの高速道路、またハノイ北部の景勝地に、つくば学園都市級のハイ・テク・パーク建設という三大案件を日本のODAで実現支援戴

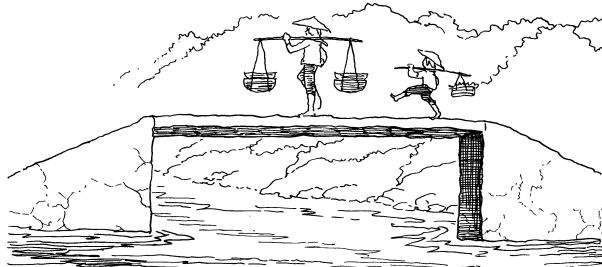
きたいと要請してきて、既に日越（推進）調整委員会が発足している。すべては、「2020年までに新興工業国となり近代国家となる」という国家目標を達成する為だ。同時に、若き新首相の狙いは、多極化始めた世界の中で、伝統的に共有する価値観を最も多く同じくする我が国との戦略的連携を強める事、世界一優れた「品質」を提供する我が国の「モノづくり」の真髓（技術とマインド）も合わせ移植し、ベトナム戦後生まれの若い世代に継承させる事の二つにある。

(二) 96年秋から始まったベトナム協会のフエ、ダナン、ホイアン（御朱印船時代、我々商社マンの先輩連が日本人町を造った）、ヅンクワット（建設中のベトナム初の石油精製プラントのある、当国最大の工業団地新都市）といった中部ベトナムの定点観測調査に、ここ数年来、大分の日本文理大学経済学部教授時代から、山邑社友にも参加願って、都度「ベトナムへの国際事業投資についての考察」や「ベトナム経済の展望」などの優れた論文・レポートを貰っているが、一緒に行脚を重ねるうちに、意気の合った社友同士ならではの、行く先々で共通の認識感得や思わぬ発見やら楽しい出会いやらを持てた。

全国最大のダナン港で我が国ODAによる防波堤築造工事を完成したばかりの、りんかい・日産建設（株）の上原輝男所長（土木技師）は小生と郷里に近い沖縄の出身だが、山邑教授の日本文理大学工学部の一期生だった事が分かった。家族は今も大分。2004年の初見以来意気投合していたが、3人で「大分の一村一品運動をベトナムでも」などと語り出すと時間を忘れ、去年二月も、そんな訳でダナンから次の目的地ヅンクワットへの出発が遅れ、上原氏の車を貸して貰って走ったが到着は夕方になり生憎く土曜日だった。しかし目的の工業団地に、宮本先輩「プ部」時代、ソ連要員で鳴らした加藤資一君が日揮のRefinery建設現場責任者として駐留していて、迎えに駆けつけてくれ、赴任早々とは思えない流暢なベトナム語で当該団地の幹部連を市内ホテルでの夕食会に招いてくれ懇談できた御蔭で、明くる日曜いささか宿酔い気味だったが午前中で、広大な全施設を見せて貰えた。お蔭で午後のAir・Vietnam便に乗れ、その晩のホーチミンでの双日協所長との会談に遅れずに済んだ。協所長はホーチミン日本商工会会長として、翌日来訪予定の奥田経団連会長一行への進講書を片手に、我々にホーチミン市場の現況と双日の業容説明を（明くる日のリハーサルも兼ね？）してくれたが、該進講書は全部練れた英文で書かれていた。

(三) 首都は中部に遷都したほうが、国土全体の均衡ある発展と国の繁栄の基となる。紙幅の関係で詳述はしないが、これが、この数年、「中部」を中心にベトナム現地調査を重ねた山邑教授の提言。ベトナム国家経済の中で、細長い中部ベトナムの果たす役割は、昔から南部メコンデルタの肥沃な農業地帯の経済（中心はホーチミン市ことサイゴンとカントー市）の簞と、北部紅河デルタの鉱工業地帯の経済（中心はハノイとハイフホン）の二つの重い簞を担いで前に進む天秤棒の役目だけとされてきた（中部人達も自認していた）が、かねて、21世紀の今日的視点で今こそ『中部』は、広大なメコン流域をヒンターランドとし、東西・南北経済回廊を軸索にしてベトナムだけでなく全インドシナを背負って立ち、アジア太平洋時代に羽ばたくべきだ、と主張している小生も、この山邑提案に全く賛成である。これこそ、ベトナム政府の目指す全国土の均衡と秩序ある開発・発展への王道であり、来るべき東アジア共同体の中でベトナムが中心となって・・・

（長演説はこれくらいにしておくが、）山邑社友は、ベトナムの遷都問題については、世界的視野で他国の実例としてワシントンやブラジリア、プレトリア、キャンベラ、スイスのベルン等の成功例も失敗事例も考察しながら、ベトナムでの適用を研究しているので機会を得て、広く「越日」の公論にも提議願いたいと思っている。



(終)

退職後の我が人生

スイスイ スラ ラッタ と 趣味に生きる

渋谷 義

ニチメン（株）を58歳4ヶ月で退職した。その後横浜の中小企業に6年半勤めた。以後、今日までの7年7ヶ月にわたる我が人生の生きざまを、趣味を中心としてまとめてみたい。退職後の生き方は、人様々であると思う。でも、人生の後半を如何に健康で快活に過ごすかは共通の課題だと思う。平凡であるが、こんな生き方もあるのかと、退職後の皆さんに多少とも参考になれば幸いです。

退職後は、読書、囲碁、長年にわたる英語を趣味とした仲間との英語デバート、カラオケ、ウォーキングや旅行が主たる趣味となった。熱を入れていたゴルフは、懐事情と他の趣味との兼ね合いで、月1回程度に減らした。退職後まもなく横浜朝日カルチャーセンターの「エッセイ教室」に通い始めて、早7年5ヶ月になる。翌年、社交ダンスを始めて、6年6ヶ月になる。

- ① 読書：退職後に最も注力したいことは読書である。年間100冊を読むことを目標にした。60～70冊は何か読んでいたが、趣味が広がり、近年は50冊程度になっている。我が部屋も書籍やCDなどで一杯になってしまったし、懐具合からも、殆ど図書館で借りている。新刊本やベストセラーでも、多少待てば全て借りられている。読書後は読書感・書評をまとめている。出版社に送り、著者から礼状をもらった事もある。月刊文藝春秋は若い頃から購読している。毎号内容が充実しており、読み応えがある。読書で見知らぬ人の貴重な、また驚嘆する人生経験や歴史などを身近に知る事ができる。素晴らしい感動を覚える。読書に勝るものはない。
- ② 囲碁：地方に単身赴任していた50歳代に囲碁に熱中した。アマ4級位の腕前から、まもなくアマ初段位になったが、その後はへボ2段ぐらいの実力に甘んじている。長月棋楽会の仲間が毎週月曜日に横浜宇宙棋院で10人位集まり対戦している。囲碁は頭脳の活性化には効能大であるが、こんな難しく上手になれないゲームはない？コンピューターのソフトも、囲碁のファジイさに音をあげて、私より弱いソフトしか開発されていないようだ。理詰めの将棋ソフトの実力は、今やプロ棋士に近づいているという。
- ③ カラオケ：我がカラオケも、ポピュラーソング、演歌、シャンソン、外国曲（英語・仏語・西語・中国語・韓国語）など、レパートリーは約500曲にも及ぶ。今や、病膏盲にいる状況である。でも、上手・下手を問わず、歌うことで若返り、ボケ防止になる。カラオケに飽き足らず、退職後まもなくフランス人のシャンソン歌手にフランス語でのシャンソンを習った。昨年末から日本人の美人シャンソン歌手のレッスンに参加している。
- ④ ゴルフ：退職後は月1回のゴルフになり腕前も落ちた。米国駐在時代や帰国後の全盛期では、ワンラウンド80台のスコアで偶に70台も出したが、今や90台で、80台は偶にしか出せない。プレイするゴルフ仲間も減ってきて寂しくなった。
- ⑤ ダンス：学生時代から親しんでいたが、60歳後半から再び習い始めた。ダンスは予想以上に、アスレチックである。体力と頭脳の活性化を要求される。どこのダンス場やレッスン場も男性不足で、困っている。ダンスの上手な男性のリボンさんを用意しているダンスとカラオケが出来る店が流行っている。第二の青春をダンスで、謳歌しようと呼びかけたい。ダンスは健康とボケ防止に最大の効ありと、健康及び医学的見地からも世界的に認知されている。

- ⑥ 絵：単身赴任時代に絵を描く事に親しんだ。色鉛筆、水彩、アクリル絵の具を使った。最近は他の趣味に時間を割かれているために、安直に絵葉書に色鉛筆で描くのがもっぱらである。絵を描いていると、無心になれるのが楽しい。
- ⑦ 語学：自称語学マニアである。英語に飽き足らず、仏語、西語、中国語、韓国語なども勉強している。退職後、YCEC（横浜時事英語研究会）にも参加している。毎月の研究発表も5回ほどしてきた。長年食材の仕事をしてきた経験から「食と料理の英語表現」や「健康・病気の英語表現」又「英和文でのエッセイの考察」などの研究発表をしてきた。ニチメンOBの長谷川洋さんも参加されている。
- ⑧ 旅行：退職後の旅行では、英仏37泊の旅を実行した。南フランスのカヌヌに20泊し、カレッジでフランス語を特訓、南フランスの旅を満喫した。パリに8泊、ロンドンに9泊した。その後中国に5泊、グアムに5泊し、ゴルフをエンジョイした。韓国に7泊した。国内旅行にも北から南へと旅したが、一昨年の夏、尾瀬に一泊し10時間歩いてきた。
- ⑨ 健康：72歳の今日まで幸い大病はしていない。毎年の健康診断でも、20項目の全ての数値ではば基準値内に収まっている。ウォーキングやダンスと食事のカロリーに配慮して、体重・ウエストもかなり減らした。おかげで、多少高かった血圧や中性脂肪も基準値内に収められた。薬や栄養剤も一切服用していない。
- 遺伝子的な要因もあるが、日頃の心がけと実行力で、病気無用と健康的な生活が出来るのではないと思う。タバコは若い時に少々吸ったが、直にやめた。酒は適量を心がけている。喫煙者には、些かきつい話になるが、内科医の息子によると、「喫煙は癌のみならず心筋梗塞や肺気腫などの疾患を招く大きな要因になる」という。また煙草の害は都会の排気ガスとの相乗的な悪影響が懸念される。
- 趣味が少々増えすぎた嫌いもある。これからは健康と真に自分のやりたいことに絞って、趣味を続けたいと思う。家族のためにも国のためにもボケずに死にたいと誰しも思うだろう。老いは誰にでも平等にやってくる。それだけに、「老いてこそ人生」であるように心がけたい。

拙いながらも以上私の退職後の人生のあらましを記してみました。この程度のことでも些かの参考の一助となれば幸甚です。

平成19年8月31日



『ローマ人の物語』を読み終えて

蜷 川 親 秀

1992年に発刊された10巻シリーズの塩野七生著『ローマ人の物語』第1巻を読み終えた時、「何とか全巻読み通すまで、生きていたいなア」と、永年の会社員卒業後の私は、密かに呟いたものでした。その後、筆者の構想が膨らみ15年で15巻となり、最終巻『ローマ世界の終焉』を読み終えた今年の正月、私は傘寿を迎えていました。

塩野さんにはイタリア政府が、2002年、国家功労賞を贈り、永年にわたるイタリア史の研究と紹介活動を讃えました。しかし、『ローマ人の物語』はトインビー著『歴史の研究』に比すべき、現代性と啓蒙性に富む雄渾の労作です。その地に、40年住み着き、個人で完成させた塩野さんの業績は、ノーベル文学賞ないし平和賞ものと私は考えます。

なぜならば、この書物は通例の歴史書とは全く異色の動機と構想から書き下ろされ、後世の研究著作を遡って原資料を尋ね、同時代人の古記録から生の息吹を汲み取ろうと務め、その結果、全編生身の人間たちの織り成す壮大な叙事詩に、さらには混迷の現代世界を照らす知恵の灯台に仕上がっているからです。

第15巻付録に、11の徳目（基本道徳）が7ヶ国語対比で示されています。自由と規律、寛容と厳格、道徳と権威、敬虔と威厳、信義と一貫性、そして人間性です。これらは、「ローマ人が自分たちにとっての基本モラルと考えていたこと」で、塩野さんは短い解釈を付けています。そして民族によって言葉は同じでも、意味するところは変わっていく、例えばラテン語の「fides」は、ローマ人にとってローマ支配下の人々の間にあるべき感情の基盤としての「信義」であったが、キリスト教徒では「信仰」に変わったと指摘しています。

これらローマ人の徳目は為政者の資質、施政方針、統治原則のすべてに反映されており、多神教時代のローマが世界史上最大の普遍国家と平和期（パスク・ロマーナ）を実現し得た背景となっています。宗教・文化・言語が違い、敵対した異民族でも、一旦降伏すれば彼らの伝統を許容し、共存共栄の寛容制作を採ったローマの偉大さこそ、21世紀の世界が謙虚に向かい合うべき鏡ではないでしょうか。

現代の派遣王国の横暴は目に余ります。人権・自由・民主から信仰・歴史までの強要、飽くなき領土欲と条約無視、異端・異教に対する憎悪と迫害、これら悪徳の行く先にパクスの世界が待つ筈はありません。憎悪を併せ持つ複雑な存在である“人間”の作る社会や国家の指導原理に、観念敵イデオロギーや既成宗教の教理が必ずしも本来の理念道理に働かなかったことも、20世紀の経験が示す通りです。

ギリシャ・ローマの神殿はいまや観光目当ての古代遺跡でしかありません。往古、そこで行われた神事・祭祀は絶えて久しいのです。ところが日本では、1500年前の記紀につながる神社が今も全国各地に脈々と存在し、毎年定期に古来の仕来りに則った式典や、氏子参加のお祭りが盛大に行われています。

神と人との交流、祖先と子孫の交歓が、現代もなお日常的に違和感なく続いている国、それが古くて新しい日本です。東海の島国に生まれた精神文化、即ち自然との共生感・大和心・武士道・職人魂の清廉と勤勉を尊ぶ伝統こそ、当代の碩学ハンチントン教授が『文明の衝突』の中で、正当にも現代の世界7大文明の一つに位置づけた日本です。

抛るべき価値を見失い、進むべき道を探しあぐねた現代世界に、塩野さんの労作と日本の精神文化の役立つ日がついそこまで来ている……私にはそんな気がしてなりません。

「如水会会報発行人の承諾を得て転載」

ベトナム駐在紀 ―サイゴン陥落・脱出行―

塚 本 幸 雄

元サイゴン事務所駐在員

○サイゴンからの脱出

1975年（昭和50年）4月8日

南ベトナム北部から北ベトナム軍と解放戦線が怒涛のごとく南下して来て既に米軍は撤退しており南ベトナム軍も崩壊に近く北部から避難民と先を争うように敗走を始める寸前の状況にあった。

サイゴン市内も私服に変えて徘徊する兵士や避難民らしい一群も現れ騒然たる雰囲気の中サイゴン陥落も予想以上に早いと云われていた。

事実、サイゴンは26日にグエン・バン・チュー大統領夫妻が台湾に出国逃亡

30日には解放軍が突入、南ベトナム軍が無条件降伏し政権は潰えたのである

因みにサイゴンは現在ベトナム社会主義共和国ホーチミン市となっている。

北からの大規模な攻勢があまりにも早かったため日本企業の撤収の準備も4月に入ってから緒についたばかりではあったが、サイゴン店としてはとにかく駐在員と家族の安全を念頭に早期出国にむけ全力を挙げていた。

4月8日の前夜までに本社から出ていた帰国指示と在越日本大使館の出国勧告に基づき筆者を含む駐在員3名が緊急出国を図ることになり朝比奈茂夫所長だけは残り本社との連絡にあたることになった（最終的に4月30日に出国）

駐在員3名とは筆者が繊維・繊維機械・化合樹を担当、漆崎隆司駐在員（元取締役）はヤンマー商内中心に機械プラントを大平栗雄駐在員はヤンマー商内専任と3名とも駐在期間は5年を超えていた

ヤンマー商内がサイゴン店の売上高の7割を超えていた当時の布陣である。

駐在員3名の家族はその2日前に家財道具の整理もつかないまま手荷物だけでサイゴンを離れ香港経由日本へ帰国していたが国際電話も通じぬなかどんな状態で日本にたどりついたか知る由もなかった。

とくに漆崎駐在員と大平駐在員の奥様はそれぞれ幼いお子さんを伴っておりその心配はいかほどであったろうか

その日朝10時ベトナム人運転の社有車にて3名が社宅を出発、本社テレックスの確認と雇員との連絡を図るためにまず事務所を目指した。

およそ15分も走り市内中心部にかかろうかとしたときに上空を飛来してきた、南ベトナム空軍機が突如大統領官邸を爆撃したのである。

その模様は見ることはなかったが物凄い爆撃音と道路前方の逃げ惑う人影に急遽引き返すこととし所長社宅へ戻り情報収集にあたることにした。

所長社宅では大使館、同業他社、有力得意先などから情報収集に努めた結果

爆撃は単独空軍機によるもので組織的反乱ではないこと 戒厳令が布かれ外出禁止となり 空港は閉鎖再開の見込みは立たないこと などが分かってきた。

余談になるが この所長社宅は遡ること7年、1968年2月の「テト攻勢」の際には解放戦線いわゆるベトナム共産党がたてこもり政府軍との激しい銃撃戦の場所となった処で壁には多数の銃撃痕が残っていた。

当時の模様は当時残留していた西尾首席、澤田次席からよく伺ったものである

午後1時頃であつたらうか戒厳令は解けぬままではあつたが空港は再開されとの情報が入り朝比奈所長ともよく検討した結果、事務所への立ち寄りを取りやめ直接空港を目指すこととしたが危険であれば直ぐ引き返すこととした。

2時過ぎに再度出発。空港への幹線道路は戒厳令下でもあり憲兵が自動小銃を構えていて時折威嚇か銃撃音がたたましく響き、それまでに地方の客先からの帰途、国道沿いにベトコンかどうか分からぬが射殺された死体を見た事のある我々も流石に緊張する。

土嚢で固めたトーチカには銃を構え目の血走った憲兵が車を止めては検問しており先を急ぐわれわれはとにかく目で合図しポケットからの10米ドルを握らせては通過する。それを4・5回繰り返したであろうかやっと3時過ぎに空港に到着したが 銃を突きつけられながらのかかる行為は二度とはできないであろう。

空港では緊急出国を図る人達でまさに混乱を極め、チェックインカウンターは長蛇の列 やっとイミグレーションにかかったところで知り合いの空港警備の警官に出会った。彼には日頃からなにかと小遣いを握らせ重要客先の入出国には便宜を図ってもらってきたが 目配せすると事態を直ぐ察知しわれわれ3人を特別にパスさせてくれた。彼に出会わなかったらその日の出国は難しかったことは確かである。

さて何とかたどり着いた搭乗待合室ではわれわれの乗るエア・ベトナム機は何時出発するか判らないまま辺りを見渡すと 赤ちゃんの泣き叫び 女性の喚き声 年寄り夫婦のうめき声 更には男たちの喧嘩寸前の怒鳴り声が絶えずまたカフェテリアはもちろん売店も閉鎖され気温は40度近くあり生水を飲む習慣のないわれわれにとって飲み水がないのはまさに地獄の責めであった。

いよいよ5時近く搭乗が始まったが離陸まで30分近くかかりやっと機は飛びあがった。最初の飲み物はベトナム産の地ビール「33」であつたが濃くてもこのビールのうまかつたこと。社宅を出てからおよそ3時間緊張の連続のなかでなにも飲み水をとらなかったわれわれにとり本当の美酒であった。

さて水平飛行に移ってからの窓外の光景は緑一杯の密林と田園地帯が交互に流れ時々赤茶けた爆弾の爆発跡がよぎる

疲れもあり眼を閉じるとエンジン音のなか思い出されるのは社宅での明け方近くの爆撃音である。サイゴンから30—50キロ離れた密林のいわゆるベトコン地域を毎朝のごとく米軍のB52が行う爆撃による爆発音であつて、これはまさに地鳴りと地震とおなじ揺れがあり都度駐在員は積み上げた土嚢で囲まれたベッドの中で眼を覚まされたものであつた。

この土嚢はいわゆるベトコンがサイゴン市内に無差別に打ち込んでくるロケット弾に備えたもので当時この土嚢の備えがないホテルでは日本人二人が直撃弾を受けて亡くなっていた。

駐在をしていた6年間を振り返っているうちに、およそ3時間後飛行機は香港に到着し 空港では香港支店の駐在員の出迎えをうけ、感激ひとしおのうちに当時の故友井章支店長により夕食会を催していただいた。

混乱と緊張からまさに開放された会食でありねぎらいの上心からのおもてなしをいただいたことは忘れられない一夜である。

○再 会

2007年（平成19年）10月3日

脱出から32年が経ち元駐在員の3人が漆崎さんの「ゴルフコース」で再会することになったが お互い記憶は薄れていたもの脱出時のことを話しするだけで場面・場面がよみがえり思い出す事ができた お二人には感謝したい。

一緒にプレーするのは30有余年振りではあったが廻りながらの冗談の交換やプレー振りなどには本当に懐かしいものがあり、それぞれのスコアの詳細は省略するとしても概ねサイゴン時代のそれとは変わらなかった。

多分体力の低下をクラブとボールの進化でカバーし腕前で更に補ったというところであろうか。

付記すれば大平さんの三男の裕さんが同行してくれたが37, 39の76で廻り本人より親の方が緊張していたのが印象的であった。

当然のことながらゴルフの記念写真はスタート前に限るが、爽やかな3人の写真を添付したい。

サイゴン脱出後の30有余年はそれぞれ海外駐在を重ね3人が同じ舞台で活躍する機会は無かったものの家族も含め健康に恵まれ業務に励むことができたのは何よりである。

私が駐在していた1969年7月から75年4月までのおよそ6年間にお世話になりました西尾敬一首席 澤田太郎次席 故鳩貝寿夫首席 朝比奈茂夫所長 木村幸史駐在員 内山田純一郎駐在員、更に一緒に脱出した漆崎さん、大平さんにはこの機会に心から御礼を申し上げる次第であります。

以 上



左から漆崎隆司さん 塚本 大平栗雄さん

回想のニチメン・バンコク支店

新 野 敬 一

1961年ニチメン・バンコク支店機械部駐在員であった小田史郎さんと知遇を得て、小田さんより、日本政府メコン河調査団（電源開発スタッフ）がタイ東北部サコンナコン地区の貯水ダム建設F/Sのため 来タイするに当たり、現地調査の協力を依頼されました。

タイ語を話せ、また一級建築士でもあり、お役に立てばと思いお引き受けしました。
これが小生のニチメンとのご縁のはじまりで、ニチメンが解散するまで続きました。

その後、大林組がタイに進出し、米国の保険会社AIAのバンコク店ビル建設工事請け負いに伴い完成までの間、タイの下請け業者の紹介、建設資材の調達等々に協力し無事完遂いたしました。

1967年には、タイで戦後初めての大型国際入札案件である“ 南タイ・プケット島における10メガワットの非常用発電所” 工事を熾烈な競争を勝ち抜き落札し、東芝／IHI協力のもと完成・引渡しまで協力した。
バンコク支店の当時の担当は長尾秀也さん、支店長は八木達也さんであった。

1960年、タイ政府も国内の工業化促進と外資呼び込みのため、投資奨励法を制定し、奨励を承認された企業に対しては、税制面その他、同製品の輸入規制などの恩典を付与した。

ニチメン、日本レイヨン、三重製網の合併で“ タイナイロン魚網製造会社” を設立し、1964年 操業開始した。

この頃の支店長は前川保男さんで、赤松駐在員が担当されていた。

ヤンマーディーゼルは ニチメン・バンコク店の機械部取り扱い品目のメイン商品で、陸用・船用エンジン共に圧倒的販売シェアを誇っていたが、タイ政府は、農業用小型ディーゼル・エンジンの国産化を求めてきた。

ヤンマーも此れに応じて、横型水冷エンジン；6～22HPの現地生産を決め、ヤンマー、ニチメンと現地販売代理店トンタイとサハチュンの4社合併会社“ YTC”（ヤンマー・タイランド株式会社）を設立し、投資奨励の認可をとり1981年開所式を行い 操業を開始し今日に至っている。

バンコク支店で歴代ヤンマービジネスを担当してきた駐在員を列举すると次の通りである。

小川―長尾―小橋―神宮―牟田―宮永―風見―橋本の各氏である。

タイで最も尊敬し、又公私ともに大変お世話になった人物を紹介したい。

その方は VIDHAYAKOM CO., LTD. の社長 Mr. OB（オブ）VASURATANAで欧米・日本とも取引があり、日本には支社を設立していた。タイ商工会議所の会頭を長く勤められ、政界では、上院議員、商業大臣、工業大臣を歴任されたが、1992年享年74歳で他界された。

1970年から1980年かけ 日タイ貿易インバランス解消のため毎年、東京とバンコクで交互に貿易会議が開催された。日本側団長は経団連副会長・田口連三氏（IHI元社長）、タイ側は上記オブ団長で毎回両国経済界代表合計150名以上の盛大な且つ白熱した討議が交わされ、小生は通訳として参加したこともありました。

1984年には、支店に警察官十数名が突如踏み込み、書類を押収され、税関法と外為法違反に問われましたが、この時も、オブ大臣のご協力で最小限の被害に食い止めることが出来ました。

この時は丁度、内坂和彦支店長と池田宏後任支店長の引継ぎ中であり、支店長社宅にも踏み込まれ、書類を押収された。

更にヤンマータイランド（YTC）に財経担当として出向中であった久保貞二駐在員の住居からも書類を押

収されたが、彼は支店とは関係ないと言うことで書類は返却して貰った。

1986年、ニチメンを定年退職後も引き続き、ニチメン現地法人の取締役・アドバイザーとして残り、1987年には、電子部品メーカー村元工作所（MIC）の海外進出に当たりタイ国に誘致することに成功し、MURAMOTO ELECTRON (THAILAND) CO., LTD. を設立し、投資奨励の認可も取得、その後順調に発展を続け、進出5年目には タイ証券取引所に上場することが認められ、PUBLIC CO., LTD. となった。

METCOには 元ニチメン・バンコク支店駐在員の石川秀雄さんが 副社長として出向した。

親会社である村元工作所は タイに引き続き、フィリッピン、シンガポール、マレーシア、インドネシア、ベトナム、中国の大連／天津、チェコ、米国にも関連会社を設立し、一層の発展を続けております。

現在METCOの取締役の一員として 村元関連会社全ての更なる繁栄を祈念致します。

最後に私が入社した1961年当時よりの ニチメン・バンコクの歴代支店長名を列記させていただきます。

大西 喜也（1960－1963）、前川 保男（1963－1967）、樋口 重雄（1967－1971）

安藤 義長（1971－1976）、八木 達也（1976－1979）、内坂 和彦（1979－1984）

池田 宏 （1984－1993）、松野 弘 （1993－1997）、星加 恭 （1997－2000）

喜多 和美（2000－2001）、宮崎 孝志（2001－2005）、（注）：2004年3月双日㈱に社名変更。

以 上

（注） 嘗てヤンマービジネスの牙城であり、ヤンマータイランドの拠点タイに駐在した多くのOBの中で偶々下記の三名が集ったもの。

北井さんは、新光商事㈱現社長である。



左から小橋雅寛さん、新野、北井暁夫さん

リタイア後の人生、いろいろ

——世界万博、ABIC、日本語教師——

村 井 靖 武

1) 韓国での「世界博覧会」

60歳の定年直前で長らくお世話になったニチメンを退職した。その時、ジェットロからの一風変わったお話が人事部を通じてあった。

それは万博パビリオンの件である。韓国政府は自国の権威発揚と世界へのPRのため、ソウル・オリンピック以後の最大の国家的イベントとして学術都市であるテジョン（大田）での1993年世界万国博覧会をプロモートしてわが国の積極的参加を求めてきた。日本政府は直ちに日本政府館の出席を決定し実施部隊はジェットロということになった。JETROは この政府パビリオンの儀典渉外部長の仕事を私にしてほしいという話だった。私はやったことのない仕事だから不安は感じたが、営業ノルマが無いという点が大変魅力的に映り、受諾した。この仕事はVIPの日本館への受け入れのスケジュール調整、接遇、各国パビリオンとの連絡等が主な仕事で、普通では到底お会いできない高位高官に接することができ、スター的存在の人たちを間近に見られるし話ができるという点では得がたい機会であった。日韓議員連盟の日本の国会議員の先生がたの訪問も受けた。元総理大臣竹下登氏が団長で、このときの韓国側の気の使いようは大変なもので印象に残った。フランスのミッテラン大統領もヘリコプターで会場に来られた。130数カ国の参加で会場はにぎやかであった。

諸外国のパビリオンとの交流もあり、友好親善に努め各国のエリートと仲良くなるのは楽しかった。私の直属の部下は日本人女性1名を別にすれば皆、日本留学経験のある日本語の上手な韓国人若手であった。彼等は毎晩のように私の部屋に遊びに来て酒を飲みながら談論風発した。好みのウイスキーは貴重品であるシーバスリーガルに決まっていた。

巷間マスコミは「日本帝国主義支配36年で韓国を駄目にした。云々---」というが、彼等インテリの日・韓間の見方はそうではなく、未来志向で建設的である。昔の歴史はともあれ今は日本が進んでるのだから学ばなければ損だという現実論でもあった。

彼らとの接触のおかげで私は本音を聞いたし、本やTVでは知りえない貴重な活きた情報を得ることができた。

2) ABICのことなど

人間誰しも60歳の坂を越えて65歳ともなれば、自分の来し方行く末に思いを馳せるだろう。その時点で私はこのままで、社会にお返しをしないでもいいのだろうかと深く考えた。即ち、曲がりなりにもつつがなく生きてこれ、今の自分があるのは誰のお蔭か？育ててくれた両親の恩はもとより、それ以外にめぐりあった多数の人達のおかげで現在の自分が存在する。それに対し社会にお返しとまでいかないまでも、何か形になる行動であらわすべきではないのか？というような思いがここ数年、心のなかに強く去来した。偶々その頃、「日本貿易会」がその傘下にNPOとして「国際社会貢献センター（英文名：ABIC）」という社会への貢献を旗印にする団体を設立した。私はなにか今の心中のもやもやの解決へのとっかかりのキッカケを得たいという気持ちで早速、活動会員にさせていただいた。

数年間のあいだにはいろいろな案件があったが、私の胸のなかに自分の社会へのお返し=ご奉仕の方向性としてはどうやら二つだなどと整理されてきた。それは未来をになう若者へ自分が蓄積してきた知識とか経験を出来るだけ伝え活用をはかること。もう一つは、海外との仕事が多かったから、外国へのお返しである。

3) 日本語教師養成講座

それから暫くして、2006年夏頃、ABICが日本語教師短期養成講座を開くという案内がメールで来た。本来なら420時間かかるのを効率的に半年の100時間で養成するという話だった。私は家族に相談したところ、家内も娘達も「お父さんは三日坊主で飽きっぽいし努力家ではないから、それに年もとってるし到底無理だ。」ということで強く反対された。そう言われると生来のアマノジャクが出てきて、それならやってみようとして6ヶ月の受講に挑戦した。初日に浜松町の貿易会の会議室に行ってみたら、驚いたことに旧知のわが社のOBが3人いた。偶然だが同じ火曜日のクラス所属だということなので大変意を強くした。顔見知りがあったことが私の緊張を和らげ、違和感なく教室に溶け込めた。初めて会う級友ともすぐに仲良くなった。皆ナイスガイだった。つくづく思うのは、元同業であるということはアウンの呼吸で話しが通じやすい。主任講師は元東食OBの吉田裕先生だった。

日本文化に造詣の深いベテランの教師だった。学生達はかつては企業戦士として華々しく活躍していた人達だったわけだが、それが同じ教室に会して、商売とは無縁な地味な学習にいそしむ姿はほほえましくもあり、なにやら滑稽でもあった。しかし誰もが極めて熱心で、私は皆の情熱に圧倒される思いがあった。6ヶ月の研修はあっという間に過ぎた。終了前に私はABIC事務局に「ここで折角教わったことを実地に生かす場を欲しい。自分でも探すが容易ではないと思うから頼む」とお願いしておいた。ある日、突然電話が事務局から来た。話は「日本語広場の上級クラスの講師」をやってほしいということだった。しかも来週からだという急ぐ話だった。即答を求められ、もともとこちらからお願いしていたことなので辞退などは出来るはずもなかった。私は高齢でもあり、27人の学生のなかには、もっと出来の良い学生は居たと思うので何故選ばれたのか不思議だったが、あとで分かってきたところでは、私を「上級クラスの教師候補」にすることが組織内で議された折に、①候補者は雑学が豊富であるらしい。このことは外国人学生を教える際に大変有益である。②過去に一番困ったケースは学生と軋轢を生む先生だが、年齢からして争いごとは起こさないだろうという安心・安定感がある点が評価できるということになったらしい。雑学が上級講師にはいかに重要且つ有用かは、後に実際に授業してみてよく理解できた。また知識だけでなく多様な人生経験と多くの分野での人との出会いの蓄積が授業内容に厚みと幅を加えるように思う。今、私は生き甲斐を感じながらこの仕事を続けているから、チャンスを作ってくれた方々には本当に感謝している。

4) 東京国際交流館「日本語広場」

諸外国から毎年大勢の研修生が日本の大学院に派遣されてくる。その国の現職の各省庁所属の公務員である。その国の将来をになうエリート達で、日本側の受け入れ校も東大を初め、著名な大学の大学院が多く、留学生の質は高い。その受け入れ宿泊施設が多額な予算で文部省が作った、お台場にある「東京国際交流館」である。ビル4棟で構成され、なかには国際会議場もあるし、学生の居住する部屋は日本の住宅レベルからいえば贅沢である。そのなかで当時の文部省の指導に基づきABICにより運営されているのが「日本語広場」であり、留学生の希望者に日本語のレッスンを無償で行う。学生は授業料を一切払わず、出欠は全く自由である。我々教師も「無給ボランティア」で、クラス編成は初級・中級・上級で上級は月・水・土曜日が開講日。

生徒の質は高いが、教師として困ることは、この日本語レベルの個人間格差と受講義務が無く、教室への出入りが自由なことが日常的な教室運営を難しくさせている。それでも中には日本語能力1級試験に挑戦しようとする学生などは真面目そのもので滞日中には是非とも資格を取得しようと真剣で、こういう学生を教えるのは教師としてやりがいがあり、こちらも一生懸命になる。

先日、課外研修として浜離宮庭園の見学と同園の波止場から船に乗って隅田川を北上し浅草に出て、浅草をガイドつきで一周するツアーを举行了。浜離宮は管理事務所の所長さんがガイド役を勤めてくださった。懇切丁寧な説明で江戸時代からの将軍家の庭園時代、さらに明治の御世には明治天皇が米国大統領をここで接待されたことなど普通の人知らないもろもろの話を交え解説していただいたことは有益であった。余談だが、この屋外研修は浅草での回転寿司が美味しかったこともあり、学生に大変好評であった。

「日本語広場」の学生はクオリティが高く優秀なのが教師にとってはありがたいし、救いであり、授業を離れた場合でも話題にことかかないし、知的な会話を楽しめる。高齢の私としては貴重な土曜日の半日をつぶし、通勤に1時間半かけてお台場に通うことはそれ程楽ではない。しかし、それを補って余りある学生たちとの授業でのやりとりと知的交流がある。彼らは犯罪が増加しつつある乱れた日本の現実を知っている訳だが、私は彼らに、昔の日本は隣近所の「肌のぬくもり」があったこと、武士道の精神があったこと、犯罪発生率は非常に少なかったこと、今こそ“共生と共感”こそが大事であること、ひいてはそれがアジアと世界の平和と安定に貢献することを、機会あるごとに訴えている。今、こうして教えている学生達が将来、母国に戻り何年後かにはそれぞれの母国で国家の中堅として活躍するときに「日本に留学していた時に、いい先生にめぐりあった。先生の話は面白かった。いろいろな交流が楽しい思い出になった。」と思ってくれるならば、それが私にとっては十分な報いとなろうし、かねて念願であった『社会への恩返し』もある程度したことにはなるのかなと思っている。まだまだ新米の教師だが、何年後かの将来、そういう日が訪れることをひそかに願っている。また、このささやかなボランティア活動を通じて少しでも国際交流、親善にお役に立つことを願っている。

以 上



ヨーロッパ駆巡り

幾 島 清

本会世話人の倉持さんから「退職後の過ごし方」について寄稿依頼あり、私がよく出掛ける内外の旅行のうち海外旅行について書いてみた。

完全な「毎日が日曜日」の生活に入り、現役時代は米国・アジア中心に駐在・出張したが、欧州へ行く機会がなかったので、先ず欧州を一回りしようと計画し、実行することにした。その旅誌を列記すると、(「内ツアー名」)

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1) 2000年7月02日－23日 | 独・英・仏・オランダ・オーストリア・チェコ |
| 2) 2001年1月23日－30日 | 「陽光溢れるスペイン・ポルトガルの旅8日間」 |
| 3) 2002年1月16日－23日 | 「夢のイタリア8日間」 |
| 4) 2003年6月01日－10日 | 「二大フィヨルドと豪華客船の旅北欧4ヶ国10日間」 |
| 5) 2004年7月02日－11日 | 「いたれりつくせりトルコ周遊10日間」 |
| 6) 2005年6月15日－24日 | 「南イタリアからエーゲ海ギリシャ10日間」 |
| 7) 2005年9月30日－10月07日 | 「列車で巡る東北旅情8日間」 |
| 8) 2006年9月02日－09日 | 「イギリスハイライト8日間」 |
| 9) 2007年6月08日－15日 | 「麗しきロシア8日間」 |

このように、一部を除き欧州中心に駆巡ったことになるが、偶々長男が転勤となったドイツから先ずスタート、家内が長時間の飛行に絶えられぬため一人旅となった。次は個人旅行では、地場での乗物に時間的なロスが多いため、始めて旅行社のツアーに参加したところ、予想外に便利だったので、帰国後ゴルフ・飲み仲間の高瀬・高松両兄にその話をすると、今後はワインを楽しむのも兼ねて三人で参加しようということになった。04年から

退職後内外でゴルフツアー三昧の江花さんも文化的な旅行もしたいと参加し賑やかな旅行となり、06年は三男のロンドン転勤で、孫の顔を見たさに一人旅。

これらの旅行記を書くにはとても紙面が足りぬので、以下新しい体験やエピソードなどについて書くことにしたい。

先ず、02年1月1日よりユーロ通貨が発行され、早々に使用する機会に恵まれ、複数国での旅行が便利となった。また、04年のトルコではイスタンブールの空港で2万円両替

すると、2億6千万トルコリラを受け取り、(事前に交換レートは知っていたが) さすがに

四人ともビックリ、旅行中百万・千万単位での支払いは気分の良いものであった。しかし、翌年からデノミが実行されたため、今後トルコへ旅行してもこの金持ち気分は味合えないであろう。トルコはイスラム教国であるので、ワインを飲めるか心配していたが、地方の何処を廻っても地場のワインがあり、安くて美味しく楽しむことが出来、トロイなど古代

遺跡が豊富、また奇岩で有名なカッパドキアもあり、お奨めコースの一つである。

本会会員の中には上記の各地に駐在や出張され、また退職後旅行された方も多いと思われ、今更観光地の詳細を書くのもおこがましいので、皆さんが余り行かれたことのない

南イタリアの旅について簡単に紹介すると、

2000年の昔ローマ皇帝の別荘があったナポリに近いカプリ島の「青の洞窟」は、晴天でも波があると、入口の低い洞窟の中にボートが入れず引返さざるを得ない旅行者が多いと言われているが、我々は運良く中に入ることが出来、その神秘的且つ幻想的な青の美しさは忘れられない。その後ソレントを経てコバルトブルーの地中海に臨み、断崖に幾重にも重なった家々や美しい海岸のある世界遺産にも登録されているアマルフィ、白亜の壁にとんがり屋根の家々が立ち並ぶ街アルベロベッロ、石灰岩をくりぬいて造った昔ながらの家並みのあるマテーラも印象的であった。加えて、エーゲ海の島々を廻るクルーズも天候に恵まれ思い出の一つである。旅行中昼・夜の食事時では酒好きの四人は必ず地場のワインをよく飲んだので、ツアーの同行の人達に「今日はあの人達は何本空けるのだろうか、また誰が一番飲むのだろうか」と囁かれていたらしい。

この年の秋に高松さんが不参加のため三人で旧満州に旅行し、次は四人でエルミタージュ美術館へ行く予定をしていたが、思いがけないことが起こった。一番若くて元気であった好漢江花さんが亡くなったのである。倉持さんも参加したその年の忘年会で居酒屋の赤ワインの在庫がなくなる程五人で大いに飲み、元気であった江花さんが翌年2月胃がんで入院、6月末に急逝するというハプニングがあり、今後四人での旅行は不可能になってしまった。亡くなる2週間前見舞いに行き、帰り際「早く元気になって来年はサンクトペテルブルグへ一緒に行こう」と励まし、彼の瘦せた手を握ったところ頷いてくれたのには涙が出て、今でもその光景は目に焼き付いている。今年高瀬さんと二人でロシアに旅行、帰国後直ぐに江花さんの一周忌でもあったので墓参りをし、墓前でその報告をした時には彼が参加した楽しい旅の思い出が甦り、帰りには同行した高松さんと三人で立川駅近くのレストランでワインを飲みながら四人での旅行を追想すると共に彼の冥福を祈った。

一般に、内外共ツアー旅行の参加者は夫婦・親子・女性の友人同士が殆どで、複数の男性の参加は同行者から奇異に見られるらしい。旅行中、食事のテーブルで同席となり、話しているうちに我々がホテルで個室をとっていることを知ると途端に打解けてくるが多かった。我々は年配者なのに、つまらぬ疑いをするのかと笑いを禁じ得ないが、さすがに四人での参加ではそう云う懸念はなく、寧ろ退職後でも良い仲間付き合いが出来てよいと羨ましがられる程であった。最近内外ツアー旅行にも年配の男性グループの参加も見られ、旅行形態も変わりつつあるが、仲間同士のツアーへの参加は海外旅行では、割高でも

相部屋でなく、個室を利用されてはと思う。

最後に私的なことだが、私は海外旅行中は毎日訪問地の絵葉書を買って日記に綴り、家に送ることにしている。ホテルで切手がなく、投函に苦労したり、勿論帰国後に着くこともあるが家族も楽しみにしており、また帰

国後これらを纏めると旅行記にもなり、切手収集にも役立っている。しかし、ロシア旅行では添乗員から、日本へ絵葉書を送っても2週間以上かかり、到着しないこともあると言われ、絵葉書に書いたものの、送るのを断念し、その保持帰ることになってしまった。

尚、会員の皆さんには退職後各地を旅行された方が多いと思われるが、仕事でなく、新しい異なった世界を見ることもあろうし、年と共に足腰も弱くなるので、元気のうちに内外旅行を楽しまれるのを是非推奨したい。

(以上)

「カダフィーに狙われた男」後日譚

浮 貝 泰 匡

前回の会報で、ニチメン同期の親友、吉川秀夫さんが、拙著「カダフィーに狙われた男」を紹介していただき、大変光栄に思っています。その一ヶ月後に、亡くなったラハデリさんの息子と三十三年ぶりに、イタリアで再会を果たすという数奇な出会いがありました。その顛末を寄稿せよと社友会事務局から、依頼がありましたので、後日談としてまとめてみました。

事の発端は、今年の三月、一通の英文メールが飛び込んできたことに始まる。

発信者は、Murad Lahderiとある。ムラドといえば、私が第二の父と敬愛するラハデリさんの息子の名前である。まさかと思いながらメールを開くと、やはり長年音信不通だったムラドからだった。

四十年以上も前、私がまだ独身でニチメン・リビア駐在員であった頃、仕事を通じて、ラハデリさん一家とお付き合いをさせていただいた。

毎日のように家に呼ばれ、奥さんの手料理をご馳走になり、同じ年代の息子のムラドとは気が合って、兄弟のように付き合っていた。ラハデリさんとの商売も順調で、順風満帆の日々が続いていた。

だが、一九六九年九月、リビア革命が起こり、王政派に属していたラハデリさん一家は国外亡命。そして、ある日、ラハデリさんはミラノ駅頭の公衆電話で不慮の死をとげた。以来、ラハデリさん一家との連絡は絶えた。

ムラドからのメールには、

「三十三年間、君を探し続けた。インターネットの検索で、やっとUKIGAIの名前を見付け、半信半疑でこのメールを出している。リビアにいたUKIGAIならすぐに返事をくれ」

とあった。

私の会社のホームページは、昨年、英文バージョンを作ったばかりで、YASUMASA UKIGAIの名前が英文で載っており、これがムラドの検索にヒットしたのだ。今までの日本語サイトでは、「浮貝」で検索しなければヒットしない。ムラドはきっと何十年も UKIGAIを検索し続け、やっと探し当てたのだ。

彼からのメールに興奮しながら、パソコンのキーをたたいた。

「そうだ。あの時のUKIGAIだ。私も君のことを探していたが、まったく手がかりがつかめなかった。すぐにでも会いたい。どこにいる」。

すぐに返事が来た。

「まだ結婚せず、イタリアのヴェローナに一人で住んでいる。母は本国に帰った。父もここにあるお墓で眠っている。話したいことが山ほどあるので、できるだけ早く来て欲しい」

ヴェローナを地図で調べると、イタリアの北、ミラノから列車二時間で行けることがわかった。

彼からのメールに興奮し、矢も盾もたまず、すぐに行くと言ったものの、いろいろ事情ができて、結局、出発は三ヵ月後になってしまった。

六月十八日、ミラノへ出発した。ミラノで一泊して、翌朝、ヴェローナ行きの列車に乗るため、ミラノ中央駅に行く。

駅では、ラハデリさんが凶弾に倒れたミラノ駅頭の公衆電話の現場を見に行く。

一階の駅構内と聞いていたので、一廻りすると広い駅の構内の壁ぎわに数十台の公衆電話が並んでいる場所があった。多分ここだろう。人通りも多いこんな場所で、凶行が行われたのが不思議だ。ラハデリさんの無念を思いながら、しばし黙祷をささげる。

列車は、緑濃いブドウ畑が延々と続く見事な景観の中を走り続け、やがてヴェローナに到着した。

ムラドが教えてくれたホテルにチェックインして、すぐに彼に電話する。

「三十分ほどで行くので、少し待ってくれ」

と言って電話が切れた。電話の声は元気そうだった。彼が来て、すぐにムラドとわかるだろうか。ロビーで座って待つのも落ち着かないので、約束の時間まで、ホテルの周りを散策することにした。外に出て十メートルほども歩くと、「UKIGAI！」と大声で叫びながら、小走りでこちらに向かってくる男がいる。

突然の出会いとなった。一瞬、誰かわからなかったが、握手してハグして、顔をまじまじと見ると、かなりやつれてはいるが、まぎれもなくムラドだった。お互いが捜し求めた相手と確認すると、もう一度ハグして、「UKIGAI!」、「MURAD!」と名前を呼び合い、しばらく言葉にならなかった。

すぐにホテルに引き返し、라운ジのソファに座って、お互いの元気な姿を見て、再び喜び合い、三十三年の空白を埋めるため、夢中になって近況を話し合った。長いこと使っていなかった英語も、自然に口から出てくるのには、我ながらびっくりした。

数時間が過ぎたのだろうか。ウェイターの「カフェのお代わりはいかがですか」という声で一息つく。

ムラドに、今回のイタリア訪問の主目的であるラハデリさんの墓参りをしたいと言うと、車で十五分ほどの墓地に案内してくれた。

墓地は山の麓にあって、その入り口には大きな花屋があり、それぞれのお墓には色とりどりの花が手向けられ、墓地全体がお花畑のようだった。

モスLEMであるラハデリさんの墓は、彼の名前が一行書いてあるだけで実にシンプルだ。異教徒の彼をカソリック教徒の墓地に埋葬するには、かなりの困難があったようだ。

墓前で手を合わせる。ラハデリさんと辛苦をともにした五年間が走馬灯のようにまぶたに浮かび、思わず涙があふれ、止まらなくなった。

手を合わせたまま十分ほど墓前に立っていたら、最後に深く頭を下げてその場を離れた。押し黙ったまま、待たせてある車に向かう。ムラドがやさしく私の肩をポンポンと二度叩いた。

街のレストランに場所を移しても、ラハデリさんの最期のこと、ムラド一人で父を弔ったこと、母の帰国のこと、母国のこと、現在の生活の様子など、話は尽きなかった。

何故、ムラドが独身のまま母国に帰らず、北イタリアの街に身をひそめているかについては、詳しくは書けない。母国政府との話し合いがうまくいって、一刻も早く帰国して、家族と幸せに過ごせる日がくることを祈るのみである。

ムラドとの別れのときが来た。ミラノ行きの列車のホームで、見えなくなるまで、手を振って見送ってくれた。

ミラノでは、リビア駐在時代、何度も通った懐かしい元ニチメン・ミラノ支店を訪れた。ビルの前で、当時お世話になったニチメンのみなさんを思い出しながら、しばらくたたずんでいた。

「コルソ・ヨーロッパ・セッテ」、元ニチメン・ミラノ事務所の住所である。まだしっかりと記憶の中にある。

ニチメン駐在員としてリビアで過ごし、ラハデリさんと辛苦をともにしたあのエキサイティングな七年間は決して忘れることはない。

センチメンタル・ジャーニーを終え、わが青春時代に想い残すことはなくなった。

(完)

ニチメン機械部門OB会『機友会』開催

与 儀 治

第二回機友会が、本年10月13日、八重洲・富士屋ホテルに70名余が出席して賑やかに開催されました。今回の特色はまだまだ若い元“花のOL”が多く参加して、文字通りOld Boyの我々を喜ばせてくれた事です。

上條達雄会長のご挨拶、土橋久男長老OBのスピーチ、石沢謙一さんの乾杯の音頭、丸山修作さんの軽妙洒脱な中締めスピーチと、和やかな楽しい雰囲気の中で時間の経つのも忘れるほどでした。

ステージで石沢さんの歌唱指導で” 呆けない小唄 ” などの斉唱も入り、さすがOB会的一幕でした。

日本綿花から総合商社への道程において地球の彼方此方で活躍した機械部門の企業戦士たちの顔、顔は、いまは穏やかでした。

ただ残念なのは初代会長の宮本和夫さんのお姿を見る事が出来無い事です。

ご冥福をお祈りします。

2006年初め、プラント本部OB会を立ち上げましたが機械部門に在籍された全ての皆さんに参加いただけるよう名称も「機友会」と改め、昨年10月白金の八芳園にて第一回機友会を開催しました。

来年は10月18日、原動機部の幹事役で、開催されます。多数の皆さんのご参加を切望致します。

【参加者名簿】；敬称略（アイウエオ順）

荒木 武雄、新崎 盛晨、池上真理子、石沢 謙一、泉 伸夫、稲治 寿、今田 時男
 上田 吉彦、生形 街子、大熊 恭子、岡崎 謙二、小川 弘次、舩田(宮田)しずか、河西 良治、
 金沢 秀雄、鎌田 亮三、上條 達雄、神谷 勤、北村 俊夫、木村 正樹、久保 貞二、
 久保 敏夫、倉又 則夫、越野 量路、小松 繁範、佐藤 鐵雄、佐藤 統次、畠川(南雲)恭子、
 杉村 照子、杉本 佳久、高木 亨一、高瀬 善雄、高橋 要司、高山 和恵、田中 久彦、
 立古 健策、土橋 久男、都築 基夫、豊間根政行、中井 浩、中嶋(有坂)洋子、中原 正紀、
 中谷 宣英、南部 捷郎、西川 周、長谷川 洋、花崎 俊雄、埴生 榮勇、林 義人、
 林 正弘、林(塩見)由紀子、平野 益子、廣内 卓生、廣田(水川)博子、福富 直明、藤野 泰三、
 古家 章、前田 進、牧野(勝又)るみ子、榊山 俊次、丸山 修作、水庫 博夫、溝江 博三、
 三原 均、宮田 信雄、矢吹 敦司、山岸 正雄、山邑 陽一、与 儀治、吉川 秀夫、
 吉弘 ちよ、米田 圭祐 (計72名)



ニチメン東京化工OB会

<第17回懇親会>

幹事 栗 田 久 彌

平成2年春に化工本部OB長老有志が創設した当会も、本年度で17回目の懇親会を迎えることが出来ました。本年度も、開催日は恒例に従い10月第三金曜日(19日)18時よりとし、会場は従前通りの鉄鋼会館で行いましたが、元ニチメン社長竹田博さん、旧東京化工本部に在籍しその後双日並びに同社関係会社等に勤務する現役OB会員、関西よりの山邑陽一さん、更には業務打ち合わせの為一時帰国中のアリスライフサイエンス米国駐在の松本豊和さんの飛び入り参加等々、普段お目に掛かり難い会員を含む総勢51名の参加を得て、盛大に行なわれました。

一方、毎年ダンディーなお姿で参加される浜田雄三元会長は、昨年に引き続き体調不良との事で本年も欠席されました。まさに画竜点睛を欠く感があり幹事としては心寂しい次第です。

予定時間経過後、長老格の古藤彰三さんの音頭で中締めを行い、来年10月17日(金)の再会を期して散会しました。

参加者名(アイウエオ順、敬称略)

会長：島 崎 京 一

阿久津 桂 子	浅 子 豊 治	池 田 格	五十畑 利 枝	岩 上 敦 司
植 木 弘 政	内 山 靖 人	大 野 悦 郎	大 野 久 生	小 平 愛一郎
大 村 健太郎	沖 田 孝 彦	小 野 寛	笠 原 聖 子	勝 田 泰 司
黒 田 克 己	栗 田 久 彌	小 浦 和 夫	古 藤 彰 三	近 藤 正 一
斉 藤 至 弘	志 水 寿 夫	須 藤 忠 昭	竹 内 可 能	竹 内 雄 一
竹 田 博	田 畑 実	丹 下 薫	栃 木 良 雄	滑 川 和 子
成 見 和 男	西 村 照 男	野 中 忠 雄	野 村 恵 子	林 悟
日 原 東 洋	蛭 田 亨	本 間 登志雄	牧 洋 生	松 本 充
松 本 豊 和	丸 山 泰 三	箕 作 武 彦	水 野 秀 雄	山 邑 陽 一
横 山 正 巳	吉 木 健	吉 田 孝 夫	吉 羽 伊津夫	吉 村 文 夫

計 51名 太字：双日(含関連会社)勤務者



島崎会長 挨拶



懇談風景

俳句の会「いろは句会」

宇治田 薫

一、句会のその後：

社友会会報No.1に当句会を御紹介してはや1年を経過した。

太田昭主宰ご指導のもと、東京小川町の会場「恭太」において月例句会を開催、去る9月26日の例会で第219回を数え、発足来18年余を迎える事になった。

また本年6月には、笹原弘幹事の計画により「筑波山」への吟行を実施した。

更に、主宰のご厚意により、他の句会との交流句合わせ会である四季合同句会が各シーズン毎に開催され、一同健吟の研鑽機会となっている。

会員14名がこの間、句作した発表句を以下にご披露します。

一、会員の発表句

錨泊の船の灯りや星月夜 (あ き ら)
古町も一日賑ふ秋祭 //

朝寒やかたこと卵茹だる音 (宇治田 薫)
急流を遡上の鮭の面構へ //

胡弓の昔暗きより生れ風の盆 (太田 琢也)
朝霧の晴れて千年杉の廟 //

一片に雨風刻す柿落葉 (久保田悦子)
冬晴れの光巻き込む水車かな //

冬めくや鉄扉重たくきしむ音 (三枝 一希)
採石の爪あと深く山眠る //

野の果てに筑波紫紺や稲の花 (笹原 弘)
秋晴や沼舟水脈をひろげゆく //

新涼や皿をはみ出す焼魚 (佐藤 秀隆)
休耕田一枚分の秋桜 //

虫喰ひの葉をかざし見る紅葉かな (下川 泰子)
江ノ島や波に漂ふ冬落暉 //

嫁がせて妻と二人のぬくめ酒 (須藤 忠昭)
寒風にバス待つ母子頬紅し //

玻璃の冬満月ををさめけり (塚本 幸雄)
京の町冴え返りつつ緩びつつ //

秋日和膝高くして鼓笛隊
重ね着て客を手招く朝市女

(福島 有恒)

//

日の筋のたどり着く先葉鶏頭
まんぢゅうの売り切れてゐる小春かな

(藤野 徳子)

//

雨去りて木の間きらめく十三夜
残り雪木蔭に丸め達磨さん

(吉村 文夫)

//

石塀で折れしわが影後の月
昨日より大きな空や櫓枯る

(若月 義和)

//



(福島有恒撮影)

前列左より	藤野 徳子	太田 昭(主宰)	宇治田 薫
中列左より	若月 義和	久保田悦子	佐藤 秀隆
後列左より	須藤 忠昭	福島 有恒	笹原 弘
	太田 琢也	吉村 文夫	塚本 幸雄

なお、上記写真には写っていませんが休会中の三枝一彦氏(俳号、一希)が9月より復帰されました。

以 上



2007年度 囲碁部・秋の軽井沢合宿報告

(10月19日～21日)」

(参加者：荒木、井田、今田、田所、吉田、榎山の6名)

双日オートモービル 榎 山 俊 次

10月19日(金) 天気：東京～曇後雨、軽井沢～雨。最初、企画していたゴルフは事前に中止と決めていたので問題なし。ゴルフに未練があった田所さんも土砂降りの雨を見て納得した様子。

タクシーの運転手さんの話では紅葉は月末頃が見ごろとのこと。寮の周りの木々もこれから色づく感じで秋の深まり行く気配を実感。

寮への途中、コンビニに立ち寄り夜食の手配。着いたら長丁場の夜戦モードへ、即、切り替え。

軽井沢は方角が悪いという今田さん、前は腰痛、今回は歯痛で右アゴにシップを貼って辛そう。でも、囲碁の方はちゃっかり勝ち越して実力を発揮。一電車遅れて到着した吉田さんもすぐに仲間入り。熱戦は夜半まで続き1時半就床。

翌10月20日(土) 朝食もそこそこに2日目の厳しい戦いが始まる。勝ったり負けたりの際どい勝負が続く。昼食はいつもの「満留井」で蕎麦を賞味。少し硬くなっている身体をほぐしながら、歩いての気分転換。寮には貸し自転車が置いてあり、3時間で300円。次回はサイクリングも良いかなと思う。

(閑話休題) docomoのケータイに万歩計付きのものがあり、「1ヶ月の記録が残るよ」と田所さん。吉田さんも同機種を所有、早速万歩計機能を始動させていた。井田さんは専用の万歩計を長期愛用していてウンチクが深い。

午後からの戦いは早打ち(早見え)の荒木さんが瞬く間に試合数を消化して、途中で午睡モードに入る。小1時間の熟睡??? 勝敗の帰趨や如何? ハンディに甘さがある(?)

井田さんが一歩先行し、最後の1局を消化した段階で9勝6敗。「優勝は考えていない、年2回の合宿で碁を打つのを楽しみにしているだけだよ」との謙虚なお言葉。

長かった2日目もやっと終わり、時計を見るとやはり1時半。戦績は、優勝：井田、準優勝：荒木、3位：今田となり、それぞれ10点、5点、2点が持ち点に加算されました。

3日目は、結果報告・表彰式を終え、恒例の連碁。3人1組での対戦は、ハンディキャップで有利の黒チーム(井田、今田、榎山)が白チーム(荒木、田所、吉田)を破って中押し勝ち。

浅間山の初冠雪を遠望しながら、駅前の「本陣」で濁り酒“千曲川”を軽く一杯、次回(来年5月)の合宿をまたの楽しみに軽井沢に別れを告げました。



食料OB会ニュース2007

倉 持 次 雄

★第13回食料OB会は、下記の要領で行ない、例年どおり大盛会でした。

日 時：2007年4月21日（土）開宴 正午12時

場 所：如水会館内 1階 レストラン「ジュピター」

受 付：世話人事務局の佐藤武宣・小野宗一両氏、早くも11時前に準備完了。

参 会 者：合計56名（紳士40名、淑女16名）参加者名を全て下記に列挙しました。

式 次 第：

- ・司会・庭野世話人代表の采配で、定刻に開始。
- ・開会の辞（倉持世話人代表担当）：冒頭、この一年間で物故された会員のご冥福を祈り、出席者全員で一分間の黙祷を捧げました。物故者は次の4名の方々です。
江花輝さん（逝去 昨年6月27日、67歳）、松浦昌幸さん（同11月21日、86歳）、
堀江善一さん（今年2月27日、77歳）、山川英夫さん（同4月5日、85歳）。
- ・乾杯：長老の一人、鈴木明さん。元気一杯のご発声でした。
- ・現役組招待者お二人のご挨拶・業務報告を頂きました：
① 橋本昌二さん——双日（株）生活産業部門食料本部食料部長
② 坂本雄二さん——双日食料（株）農産・食料原料本部本部長
- ・近況報告：タイ・バンコックで活躍中の須佐美繁夫さん。
- ・中 締 め：坂本晤さん
- ・閉 会：予定時間を超えて皆大いに語り合い、来年の再会を約しつつ散会しました。

★当日の参加者名簿（敬称略、アイウエオ順、）：

幾島清、池本俊通、石田百合子、今村豊昭、入野英次、及川百合子、大塚静子、太田恵司、岡妙子、岡部健太郎、納尚美、雄谷芳夫、小野宗一、片瀬澤子、木崎寿子、倉持次雄、紅林哲夫、黒住厚、小西重勝、坂本晤、桜井妙子、桜井征夫、佐渡隆、佐藤安喜子、佐藤悦三、佐藤武宣、佐藤照子、佐藤雄三、渋谷義、志村玲子、末包恵美子、須佐美繁夫、鈴木明、鈴木隆子、須田博子、高瀬允宏、高松宗信、田中清、竹中保、外村和之介、蜷川親秀、庭野松三、長谷川梅子、服部忠雄、久下真司、久富正明、藤倉待子、堀麟三、松沢幸雄、松田實、村井恵以子、村井靖武、安田直次郎、山本昌裕、吉川敏朗、渡利陽。

★来年度・第14回食料OB会の予告：

日 時：2008年4月19日（土）受付開始 午前11時半

場 所：如水会館、3階 富士の間

詳細は来年2月吉日にご通知しますが、出来るだけ多数のご参加をお待ちしています。

——以上

【OB著作出版ニュース】

佐竹博司さん（1957年入社・繊維部門出身：米州、アフリカ駐在）がこの度、本を出されました。題して、“いつまでも現役人生を走り続けるために”。

2007・9・30 発行元 ㈱幻冬舎ルネッサンス。

佐竹さんは現在人材派遣会社㈱サブスリー・コンサルティングの社長。

<http://www.sub3.co.jp>

2008年度の新年会でお祝いの対象となる米寿以上の長寿会員の皆様

1 内 藤 謙 二	5 山 口 良 孝	9 富 田 幸 吉
2 古谷野 役 士	6 住 山 忠 雄	10 土 橋 久 男
3 藤 田 一 郎	7 柿 本 寅之介	11 細 江 正 也
4 浜 田 雄 三	8 佐 藤 信 世	(敬称略)

註：上記リストの掲載順序は生年月日順と致しましたが、細江正也様の生年月日は不詳部分が有りますので最後尾記載としました。

(御 願 い)

上記のリストは双日本社のご協力も得て作成したのですが、人事データーが必ずしも完全なものでは無いと考えられます。

万一リストに漏れておられる方、若しくは その様な方をご存知の方がおられましたら、誠にお手数ながら世話人までご連絡下さい。直ちに追加いたします。

尚、今回の長寿会員とは2008年1月1日現在数え年で88歳（2008年中に満87歳の誕生日を迎えられる方）及びそれ以上の方々を意味します。

長寿のお祝いに関する取り扱い細則

ニチメン東京社友会『会則』第三条（事業）1項の内、慶事について次の通り定める。

第一条 米寿、白寿、を迎えた会員に対し当会として祝意を表する。

第二条 その祝意として、当会開催の新年会に於いて、祝い金を贈呈すると共に対象者を当会の『会報』及びホームページに掲載する。

第三条 以降、名誉会員として処遇し、次年度以降の年会費及び懇親会費用を免除する。

第四条 祝い金としては、30,000円相当のギフト券とする。

第五条 米寿（88歳）、白寿（99歳）、の数え方は「数え年」とする。

平成19年10月1日制定

補足 当細則施行初年度に於いては、米寿以上の会員全員を年齢に関係なく、対象者とする。

役員・世話人

会 長 河 西 郁 夫

副 会 長 岩 田 昭 二 河 西 良 治（新任）＊

監 事 丸 山 修 作 廣 田 雄 太 郎

世話人代表 倉 又 則 夫

世 話 人	石 川 博 保	大 山 弘 雄	倉 持 次 雄
	栗 田 久 彌	高 木 亨 一	西 村 照 男
	橋 本 春 彦	長谷川 洋	花 澤 和 郎
	浜 口 信 恭	塚 本 幸 雄（新任）	沖 本 達 也（新任）

（＊）副会長 石原啓資 平成19年7月14日付けで退任。

双日株式会社からのお知らせ

双日株式会社 人事総務部

年金記録問題について

ご承知のとおり、年金加入記録をめぐる問題がここのところクローズアップされております。

在職中に関しては、会社から社会保険庁への保険料納付及び事務手続きは滞りなく行っております。

社会保険庁での、個人毎の年金加入記録については、会社側で確認出来る仕組みとなっておりませんので、ご確認されたい場合は、最寄りの社会保険事務所にお問合せ頂きたく宜しくお願い申し上げます。ご自身で、最寄りの社会保険事務所に行かれた結果、ご自身の会社での職歴情報等が必要となった場合については以下までご連絡頂ければ、適宜、対応しておりますので、お問合せください。

連 絡 先：双日シェアードサービス㈱ 人事総務サービス部（年金担当）

住 所：〒107-8655 東京都港区赤坂 6－1－20 国際新赤坂ビル西館13F

電話番号：03－5520－5130 FAX 番号：03－5520－2430

E-Mail：nenkin@sojitz.com

日本と各国との社会保障協定について

各国との社会保障協定の状況につきまして、以下の通りとなっております。

ドイツ、イギリス、韓国、アメリカに続き、本年・平成19年1月にベルギー、6月にフランスとの協定が発効となっております。引続き、カナダ・オーストラリアについては、発効に向け両国で準備中、また、オランダについては現在協定に関して交渉中という状況となっております。

尚、社会保険庁ホームページの社会保障のコーナーにおいて、各種関連情報が掲載されておりますので、ご参照頂ければと存じます。

社会保険庁ホームページ：http://www.sia.go.jp/

社会保険庁ホームページ内 各国との社会保障協定：http://www.sia.go.jp/seido/kyotei/index.htm

訃 報

お悔やみ申し上げます。

生前の面影を偲び、衷心よりご冥福をお祈り致します。

ニチメン東京社友会

	氏 名	出身部門	死亡年月	享年
1	浅 川 昭 二	化 工	2007年 7 月	80歳
2	任 田 治*	木 材	2007年 7 月	63歳
3	酒 井 泰 平*	機 械	2007年 7 月	83歳
4	安 部 和 友	食 糧	2007年 8 月	79歳
5	林 健太郎	鉄 鋼	2007年 9 月	72歳
6	手 塚 敏 夫*	物 資	2007年10月	81歳
7	東 井 康 恩*	電 機	2007年11月	68歳

(*印は当会会員)

ニチメン大阪社友会

	氏 名	出身部門	死亡年月	享年
1	亮 木 俊 二	織 維	2007年 7 月	85歳
2	増 田 定 雄	紙 パ	2007年 8 月	78歳
3	爲 村 収二郎	織 維	2007年 9 月	85歳
4	牧 醇	織 維	2007年10月	76歳
5	水 口 充 功	紙 パ	2007年11月	68歳



【編集後記】

昨年、会報第1号を出す時は、全くの手探りであったが、今ここに第3号を出すに至り、何となくノウハウが分かったような気がする。

しかしOBの皆さんのご寄稿無しには、成り立たないOB会誌です。今後とも宜しくご支援・ご指導を御願いたします。

前号においては掲載文が東欧・ロシア特集の感があったが、今回は意図してBRICs関連記事をも特集した。勿論、その他多岐に亘る記事も載せました。

今回、115年前のニチメンマンの足跡をも垣間見る事が出来ました。ジャパンコットン・日本綿花(株)創設早々に、原綿直接買い付けの為に、インド・エジプトに飛んだ佐野常樹初代社長の史実を、『ニチメン百年』記念誌で、初めて知りました。

会報が、我々の青春プレイバックとはいかないまでも、往時を偲ぶ縁となることを願って。

(長谷川 洋)

第二号に掲載の『カダフィーに狙われた男』のご当人、浮貝さんの後日譚を載せる事が出来ました。人に歴史あり、“人生万事塞翁が馬”などと言うが、出来れば平穏な人生を送りたいのが凡夫の願いである。

商社マンは地球上の多種多様な民族・政治体制・宗教・経済情勢の国々で活躍しなくてはならない。一人の人間では、その活躍の場は、限定的だが、会報に記載された各OBの経験談は、今にして知る、世界を馳せる商社マン物語で大変興味深いものがある。

今回、大阪社友会『会報』創刊号(10月)が100部、東京にも恵贈されました。1月18日の社友会“新年会”にて、先着順ながら出席者にお配りいたします。

ご壮健にて新年をお迎えください。

(高木 亨一)

ニチメン東京社友会

〒107-8655 東京都港区赤坂2-14-7
双日(株)内 東館17F

発行人	倉又 則夫	代表世話人
編集責任者	長谷川 洋	世話人
アドバイザー・スタッフ	高木 亨一	世話人
	倉持 次雄	世話人
印刷所	有 関 内	印刷